学生 FD と大学マネジメント

報告者
山下　一也（島根県立大学　副学長(出雲キャンパス担当)）
吾郷美奈恵（島根県立大学　看護学部　教授）
安村　仁志（中京大学　副学長）
安田　俊哉（中京大学　経営戦略室業務総括課担当課長）
平岡　聡　（京都文教大学　学長）
村山　孝道（京都文教大学　教務課長）
川原　俊明（学校法人追手門学院　理事長）
梅村　修　（追手門学院大学　基盤教育機構長）
岸岡奈津子（追手門学院大学　教育開発センター　研究員）

コーディネーター
木野　茂　（立命館大学　共通教育推進機構　教授）

参加人数
74名

FD は教育改革のための教職員の取り組みであるが、大学は教員・職員・学生の三者が構成員であり、学生は単なる受益者ではなく、大学教育の中では主体者である。さらに FD 義務化以後、「学生の主体的な学び」が強調されるようになったこともあり、学生の視点からの教育改善活動（学生 FD 活動）が急速に広がっている。なかでも、大学マネジメントの観点からこの学生 FD を率先して支援している大学も増えている。

今回はその中から 5 年以上の活動実績を積んでいる追手門学院大学と京都文教大学、さらに最近取り組みを始めた中京大学と島根県立大学の 4 大学にお越しいただき、それぞれトップマネジメントの側から教育改革における学生 FD への期待を話していただく。さらに各大学で学生 FD を担当している教職員から具体的な活動状況について報告していただき、分科会ではこれらの報告を受けて、参加者とともに大学マネジメントの観点から学生 FD について考えたい。

〈第３分科会〉

学生 FD と大学マネジメント

１．本分科会のねらい

学生 FD という活動を最初に始めたのは 2007 年に結成された立命館大学の学生 FD スタッフである。

学生 FD とは、授業や教育の改善に関心を持つ学生が、その改善のために学生自身が主体的に取り組む活動であるが、授業や教育の改善は大学の FD の目的そのものであるから、学生 FD は当初から大学側との連携を求めてきた。

さらに 2008 年の FD 義務化が学生 FD にとって追い風となっただけでなく、2009 年から始まった全国の学生 FD 交流集会である学生 FD サミットによって急速に各大学に広がり、これまでに日本の大学数の 1 割を超える 80 大学で学生 FD が行われている。

学生 FD の大目標が教育改善であることはどの大学においても変わらないが、具体的な活動となると大学の設置形態や学部構成・学生数・立地地域や大学の理念・教学方針によって異なり、さらに学生 FD スタッフの規模や活動の経緯によっても異なる。したがって、要は自大学で必要な課題を自大学に適した方法で取り組むのが基本であるが、そのためにも他大学での実践とその結果は各大学にとっても貴重な参考と教訓になる。学生 FD サミットはまさにそのための交流の場であり、学生 FD スタッフにとっての研修の場となっている。

FD フォーラムでも第 14 回（2009.3）、第 16 回（2011.3）、第 18 回（2013.3）でこの学生 FD の活動を取り上げてきたが、今回は大学マネジメントの観点から学生 FD に期待し支援している大学側から報告をしていただき、学生 FD の今後について考えることを目的とした。

２．報告の概要

最初にコーディネーターから分科会の趣旨説明を兼ねて、学生 FD についての説明を行った。その内容は、学生 FD とは何か、学生 FD は日本独自のもの、主な活動内容、サミットを通じた各大学への広がり、大学マネジメント側からの期待、などで、添付のスライドを見ていただきたい。

次いで、四つの大学から大学マネジメントの筆頭に立つ理事長・学長・副学長の方々に学生 FD と大学マネジメントについての報告をいただき、さらに具体的な活動については学内で支援されている教職員の方々から報告をいただいた。4 大学のうち追手門学院大学と京都文教大学は 5 年以上の活動を積み重ねている大学で、島根県立大学看護学部と中京大学は比較的最近になって始められた大学である。

各大学の報告内容は添付の報告またはスライドをご覧いただきたい。ここでは報告の骨子を目次風に記しておく。

報告 1．島根県立大学　「看護学教育における大学マネジメントと学生 FD」

山下一也（副学長）、吾郷美奈恵（看護学部教授）

・島根県立大学出雲キャンパスのあゆみ
・看護学部の育成する人材像―自ら考え行動できる、視野の広い専門職業人
・学生 FD に期待していること
・出雲キャンパスにおける FD 委員会の活動
・客員教授の特別講義「大学を変える、学生が変える」
・学生 FD の誕生、学生 FD サミットに参加
・学生とともに進める FD 活動

報告 2．中京大学「学生 FD と大学マネジメント―中京大学からの報告」

安村仁志（副学長）、安田俊哉（経営戦略室業務総括課担当課長）

・FD 活動の創始期と現在の FD 活動
・2012 年度、学生参画型 FD について検討開始
・中京大学学生 FD スタッフ：SearCH（サーチ）
・学生 FD スタッフの応募理由及び活動への想いと学生 FD 制度導入の大学としての想い
・大学マネジメントにおける学生 FD 活動の役割・期待
・学生 FD 活動の具体的紹介
・学生 FD 活動の今後

報告 3. 京都文教大学「京都文教大学における学生 FD と大学マネジメント」

平岡　聡（学長）

・大学の紹介
・教育活性化の戦略：共生効果を生む
・戦術と成果
・成果が上がった要因
・課題
・学生 FD への今後の期待

村山孝道（教務課長）

・6 年弱の経験から見えたもの
・FSD プロジェクトの紹介
・教務課が支援している教育領域に近い学生の活動
・FD と学生 FD の関係
・学生 FD の特徴
・まとめ

報告 4. 追手門学院大学「学生のために大学を変える」

川原俊明（追手門学院　理事長）

・「大学を変える、学生が変える」
・2009 年からの「学生 FD サミット」
・2012 年冬「追手門サミット」、さらに 2015 年夏にも開催予定
・追手門学院での大学ガバナンス改革
・教授会および全大学教員のグループワークを実現
・理事長・学長と学生とのランチミーティング
・理事長・学長と大学教員との面談
・追手門学院大学のさらなる改革を拓く

梅村　修（基盤教育機構　機構長）・岸岡奈津子（教育開発センター　研究員）

（注：岸岡氏は急病のため、当日は欠席）

・追手門学院大学　学生 FD 活動の軌跡　2009 年度～ 2013 年度
・学生 FD 活動は、追手門学院大学に、どんな変化をもたらしたか？
・追手門学院大学のガバナンス改革の軌跡　2009 年～ 2014 年
・追手門学院大学　学生 FD 活動の軌跡　2014 年度
・教育開発センターの設置
・2015 年夏　追大学生 FD サミット　開催決定

3．質疑ならびに全体討議

4 大学の報告の後、参加者から提出された質問・意見用紙をもとに質疑ならびに全体討議を行った。

最初に各大学への個別質問に対する回答を受け、その後はコーディネーターから記載内容にもとづいて記載した参加者に振りながら、全体討議を進めた。

なお、質疑・回答の要旨はコーディネーターの責任でまとめた要約であることをお断りしておく。

島根県立大学への質問と回答

・授業アンケートを記名式にした理由→学生に責任を持って評価してもらうため。
・学生 FD スタッフは大学側が提案したことを活動しているように見えたが？→最初は学生も何をやってよいかわからないので、こちらからいろいろ言ったが、実際に実行するのは学生たちであるから、今は自分たちでやりたいことを始めている。
・学生 FD スタッフに委嘱状を交付したことで学生に変化は見られたか→サークルと違うという意識を持ってもらい、学内にも周知してもらうためで、良かったのではと思う。
・一人で動ける主体性を持たない学生へのアプローチは？→学生 FD スタッフにはそういう学生をサポートして一緒に動けるようにしてほしいと思っている。
・来年度はどういう形で募集するのか？→学生たちが主体的に募集している。

中京大学への質問と回答

・来年度の学生スタッフの募集方法について→全学生対象であったり、新入生対象であったり、さまざまであるが、学生の主体性で実施している。
・教職員はどのように関わっているのか？→学生のミーティングには参加しているが、必要最低限の範囲内で対応していくというスタンスである。教員はできるだけ学生より先に言い出すことは避け、議論がずれたようなときに修正したり助言する役割で、職員は学生の相談窓口役や自治会等他団体との連携支援などをやっている。FD 委員会の委員長でもある副学長は学生ミーティングには時々、懇親会には必ず顔を出すよ

うにしているが、これは大学側も力を入れているというメッセージでもある。

追手門学院大学への質問と回答

・理事長らとのランチミーティングに参加する学生の人数、および学生の選出法について→2年ほど前から始めたが、2週間に1回、1回あたり5-6人で、学生課が学生集めの窓口。最初は優等生ばかりだったが、一般的な学生と話したいということで、そのうち、自宅通学の学生や、寮に入ってる学生、スポーツクラブに入ってる学生、留学生とか、いろんなジャンルから集めてくれるようになった。

学生FDに対する職員の関わり方について

中京大への質問にもあったので、先発の2大学にも答えてもらった。

追手門学院大学：梅村氏

・追手門学院大学では下請けしているのは教職員で、学生からの思いを後押しする役目に徹している。何か問題が起きそうなときは先に察知してセーフティネットを引いておき、致命的な傷を負わないようにしてきた。そういう姿勢でやってきた。こちらから整理してやると「やらされ感」が出てきて何事もうまく行かない。まず学生の大学を良くしていきたいとの意欲ありきだと思っている。

京都文教大学：村山氏

・職員は縦割りになっているので、そこからはみ出るのはどの大学でもなかなか難しいと思う。京都文教大学は規模が小さいので、やりやすかったのかもしれない。それ以外にも、本学ではFD委員会の中に職員も正式メンバーとして入るようになり、そこでテーマを決めて担当するようになったので、FSDについてもいろんな部署の職員が学生と一緒にやることが日常的になった。そういう仕組みは大切。ただし、心が伴うことがもっと重要なので、自分は最初はアフターファイブでクラブ活動みたいにしてやるのがよいのではないかなと思っている。

学生スタッフの募集とその後について

これも中京大学への質問にもあったので、先発の2大学に報告をしてもらった。

追手門学院大学：梅村氏

・学生のリクルートの問題だが、本学でももちろん、新入生にチラシを配ったり、ポスターを貼ったり、オリエンテーションではスタッフが勧誘活動をやったりしている。しかし、そうやって集めた学生よりも、夢に向かって頑張っている先輩の姿を見て同じ理想に向かって自分も進みたいという意欲や熱意を持った学生の方が本物で長続きするように思う。

京都文教大学：平岡氏

・「京都文教入門」の授業改善の話をしたが、私の方から学生の意見を聞きたいということで、私の授業で比較的熱心で意見を言ってくれそうな10人くらいの学生に声をかけたのが始まりである。もう一つは「入門」の授業の後、茶話会というのをやった。もう一つは「入門」の中でPRフェスタというのを始めたが、その中でもFSDのPRもしている。また「入門」で活躍している先輩の姿に憧れて入ってくる学生もいる。

京都文教大学：村山氏

・募集に関するチラシはやったことがないくらい、リクルートに頑張ったことも苦労したことも実はない。FSDに学生を集める一番は先輩のロールモデルにつきる。スタッフに動機を聞くと、大学を変えたいとかではなく、自分も先輩のようになりたいという自己実現のためがほとんどで、それが大学に貢献できるということを感じたときに自己肯定感がぐんと高まって輝き始めるのだと思う。

学生FDスタッフと元スタッフに聞く

ここで、参加者の中に追手門学院大学の学生FDスタッフと、立命館大学の最初の頃の学生FDスタッフで現在他大学の職員になっている人がいたので、その時の思いを話してもらった。

追手門学院大学の学生FDスタッフ

・自分は大学に入ったときに私語なんか見て失望していたが、そのときに大学を良くしようという団体があるのを知って、自分もやりたいと思って入った。

立命館大学の元学生FDスタッフ

・自分も学生の頃、なんとなく時間を過ごしているように感じていたところが、ちょうど大学で学生FDスタッフを立ち上げようとしていたのを偶然見つけて行ったところ木野先生に出会ったのが今の人生の始まりである。スタッフでも最初から大学を変えようと思っている学生はまずいないと思う。普通の学生がちょっとしたきっかけで入ってどんどんはまっていくということだと思う。もちろん全員ではないが気持ちが合致した人が残っていくのだと思う。

学生FDスタッフが冷たい目で見られることは？

学生FDスタッフの思いを知るには「学生FDサミット」に行ってみるのが一番の早道であるが、サミットに参加した畿央大学の職員から、そのときある学生が周りから何で学生FDをしているの

がと冷ややかな目で見られていると言っていたが、そういう傾向はあるのかという質問があった。これについてはコーディネーターの木野から答えた。

・お昼休みの間にその質問を報告者の方々に紹介したが、4大学ではそういうのは聞いたことがないとのことで、むしろスタッフをやってることに自信を持っているので肩身の狭い思いなど感じていないのではとのことであった。多分、学内で大学のバックアップも少なく、まだ活動実績もスタッフの人数も少ないからではないかと思われるが、大学側の支援と活動実績が上がれば胸を張ってやれるようになるのではないかと思う。

教育改善で、学生視点と教員視点は一致するか？

桃山学院大学の教員より、教育改善といっても、学生視点と教員視点では改善ポイントやゴールが必ずしも一致しない場合があるのではないかとの質問があったが、これも木野が答えた。

・それぞれの求めるところが一致しないことはあると思う。でも一致しているところは一緒にやろうじゃないかというのが学生FDであるが、それは学生が声を上げないことにはわからない。その上で、一致しているところはすぐにでも改善に向かえばよいし、一致していないところは話し合いながら一致点を見つけていくということが大事ではないか。今までは教員は学生の思いをわかっていると思っていたが、実際に話し合うとわかっていなかったことがわかってくる。それが学生FDだと思う。

学生はどんどん声を上げてくれればよい。それを受けるかどうかは、そこから始まる。ただし、教員や大学の方はちゃんと答える義務があるし、一致したものについては実行する責任もある。学生FDと教職員や大学との関係はそういうものだと思う。

学生FDは様々な力をつけることにもつながる

次いで、金沢星稜大学の職員から次のような意見があった。

・新入生に学習指導のことで話す機会があり、勉強以外に何か一つやるようにと言っている。就活の時に、勉強以外に一生懸命したことはありますかということを必ず聞かれるからと。そうすると学友会に入ろうとか、学園祭の実行委員会に入ろう、さらに本学ではさまざまなプロジェクトもあるのでそういうところへ入ろうとかが、自然に出てくる。学生FD活動を推進することは、そういう動きを促すことにもつながるのではと思う。

学生FDでできなかったことはないか？

岡山理科大学の学生FDスタッフ会（FLATz）の学生から、「昨年9月に活動を始めたばかりだが、できたことよりもできなかったことがないか聞きたい」との質問があった。

・（梅村氏）学生FDは2009年から行われているが、学生たちがやりたかったことは大方実現していると思う。私はやりたくてできなかったことは思いつかないので、学生スタッフに話してもらう。

・（追手門学院大学の学生FDスタッフ）自分は学生FDに入ってポスターのイラストとかできるからやりたいことができてると思う。また学校も良くしていきたいと思ってるから、それもできてると思う。

・（もう一人の学生スタッフ）自分はこれまで実現できなかったことをこのスタッフに入ってできたので満足している。実現できなかったことはまだない。

学生FD団体と他団体とのコラボレーションは？

次に、昨年夏の学生FDサミットを開催した京都産業大学の職員から情報を求める要望があった。

・本学では学生FDスタッフ（AC, 燦）だけでなく、広義で「大学をより良くしよう」と活動する委員会や学生団体が多々あり、中にはコラボレーションして全学FD／SD研修会を企画・開催する学生達もいる。そのような団体のコラボレーションのような動きがあれば知りたい。

・（木野）これについては、学生FDと共同ないしは連携で行われている企画は実際にいくつもの大学で見られるので、今後の学生FDサミットなどで情報交換していただきたい。

獨協大学外国語学部と徳山大学から

最後に、コーディネーターからの依頼で、三人の参加者に発言を求めた。

一人目は島根県立大学看護学部と同じように学部レベルでの学生FDを以前から行っている獨協大学外国語学部の教員である。

・学部長をしていた時に学部でFDを始めたが、教授会でもなかなか動かなかったので、それならと学生に呼びかけて学生FDサミットに参加した。戻ってから学内でしゃべり場を始めたが、外国語学部以外の学生はあまり関心がないので、学生FDは学部だけでやっている。

二人目は、今回初めて学生FDを知ったという徳山大学の学長である。

・学生FDというのは今日初めて聞いたが、面白い発想だと思う。学生の意見の拾い上げながらFDを進めて行こうというのは非常に良いアイデアだと思う。本学でも学生モニターなどでアクティブラーニングの進み具合のアンケートを取るなど、それに近いものはやっている。今後の参考にさせていただきたい。

日本大学における学生FDの取り組み

三人目は、学生数日本一の日本大学で学生FDを支援している本部職員である。

・日本大学は14学部8万人弱の学生数で日本一大きい大学であるが、ここで学生FDをどのように全学に広めていくかは大きな課題である。これまで手をこまねいていたが、学生FDサミットで刺激を受けて、2013年からサミットを真似て、CHAmmiT（チャットとサミットの造語）というのを始めた。実は本学は学部ごとにキャンパスが分かれており、学部を超えるとお互いに知らないという状況なので、年に一度くらい学生・職員・教員が三位一体となって学生FDというものを少しでも多くの人に知ってもらうことが目的である。

幸いにして、本学では2012年に文理学部で学生FDの組織が立ち上がっているので、文理の学生から学生発案型授業の紹介とかサミットの報告などをしてもらいながらCHAmmiTを続けている。昨年12月の第2回目には全学から211名が参加し、木野先生にもお越しいただいた。

その後、一部の学部ではしゃべり場的なものを定期的にやり始めており、少しずつ芽が出始めたなという実感を持っている。文理学部の取り組みをロールモデルにしながら広がってくればと思っている。

4．まとめ

分科会では、報告者から最後に一言ずつ感想ないしは意見を述べてもらった。

島根県立大学・山下氏：学生FDが成功するためには、若い職員でチームリーダーとなってやってくれる人がいることと、外部からこられた職員もいることが大事だと私は思う。

島根県立大学・吾郷氏：本学が始めた学生FDも20年も経てば良かったかどうか評価が出ると思うので、きちんと見守りながら真摯に受け止めていきたい。

中京大学・安村氏：日本大学と同じように11学部を持つ大学としては、まず大学からどういう教育をしていきたいのかということを学生に発信せねばならない。その上で、学生からの意見も聞いて応答する場面をいかに作っていくかとうのが一番重要ではないか。その一環として学生FDスタッフがあるのだと思う。

本学では教養部が存続しているので、授業については学部を超えて経験交流会を行ってきた。そういう土壌があるので、職員や学生とも話し合わねばいけないということで、学生FDにもつながっているのだと思う。学生FDスタッフを育てていきたいという思いを改めて強くした。

中京大学・安田氏：今日の全体を通して「期待感」を強く感じた。学生、大学、そして学外にも。本学のサミットに行った学生の報告会を見ても、やる気のある学生は期待感に応えて育ってくれることが確認できた。

追手門学院・川原氏：学生FDの過程で学生がどれだけ成長しているかは私の目から見てもわかる。それだけ学生FDというのは素晴らしいものだなと思っている。そういう学生たちが自分たちの大学を良くしようと考えてくれているわけだから、大学としては当然それに応える立場にある。そういう意味で本学は今後も学生FDを全面的に応援していきたい。

追手門学院大学・梅村氏：最近、教員の専権事項のFDに学生が口出しをするのか、専門性もない学生に何ができるのか、と言われる人もいるが、これは誤解で、FDは学生とともに進めて行くべきという考え方である。

先ほど、金沢星稜大の方から出口という話があったが、学生FDに邁進した学生の中には大学職員になる人もいる一方、活動によっていわゆるジェネリックスキルには長けているけども基本的な学力が低いために面接の前に落ちてしまうという学生もいる。そういうことに最近気が付いたので、学生FDをやる意欲と意識のある学生にはもっともっと勉強してもらいたい。きちんと勉強して学生FD活動をやってもらいたいという思いが非常に強い。

京都文教大学・平岡氏：もしこれから学生FDをやっていきたいなと思われる大学はあれば、学生、

職員、教員、どのレベルでも結構なので、ぜひつながっていきたいなと思う。それによって新しい価値が生み出され、双方にメリットのあるような取り組みができたらと思う。ぜひその際は京都文教大学にもコンタクトを取っていただきたい。

京都文教大学・村山氏：お配りしたFSD冊子に載っている役職者のインタビューの記事だが、とてもうれしそうにされている。普段は硬い人でも学生と触れ合い、頼られるとこのような顔になる。学生FDを推進する上でキーマンに理解を得ることはとても大切。教職員からの依頼より学生からの方がずっと理解してもらえると感じている。

学生FDがFDにもSDにも効果があることを感じているが、アセスメントをしていない。今、私は大学院でそれをやろうとしている。学生との関わりの質と量が職員のプロフェッショナリズムとモチベーションの向上に相関するかどうかを調べようと思っている。職員の方には是非ご協力を。

今回の分科会では、これまでのFDフォーラムで行ってきた学生FDの取り組み紹介だけではなく、初めて大学マネジメントのトップに立つ方々に大学マネジメントの観点から学生FDへの期待を語ってもらった。これを契機にさらに多くの大学で学生FDが注目され、広がっていくことを期待したい。

最後に2015年度の学生FDサミットの開催予定を記しておく。

2015年夏・学生FDサミット
2015年9月2日（水）3日（木）
追手門学院大学

2016年春・学生FDサミット
2016年3月12日（土）・13日（日）
日本大学（文理学部キャンパス）

第20回FDフォーラム　第3分科会（2015.3.1）

学生FDと大学マネジメント

趣旨説明と本日のプログラム

立命館大学　　木野　茂

学生FDとは？

- 授業や教育の改善に関心を持つ学生が
- その改善のために、学生自身が主体的に取り組む活動を指し
- 大学側との連携を求めるもの

大学を変える、学生が変える

つまり、学生FDとは

- 学生FDの三つのキーワードは、教育改善・学生主体・大学との連携
- したがって、最近の広範な大学FDのうち、学生が関心のある授業や教育の課題について取り組む活動を指す。

学生FDは日本独自

- 1970年前後のStudent Powerを受け、欧米では大学マネジメントや評価活動にまで「学生参画」が進んだが、
- 日本では大綱化以後もFDへの学生の関与はほとんどなかった。
- この遅れを取り戻すには日本では「学生FD」方式が効果的。

主な活動

- 授業や教育についての学生の声を教職員や大学に伝える→しゃべり場、フォーラムetc
- 学生の視点から授業を良くする
  →授業紹介、授業改善案、学生発案型授業
- 学生同士で学びへの意欲を高める
  →履修相談、教員や職員との交流
- 学びの環境改善
  →施設・設備、システム・制度などへの提案

FD義務化直後、学生FDサミットで急成長

サミット	開催校	学生・院生	教職員他	総数
2009夏	立命館大学	51	48	99
2010冬	立命館大学	122	67	189
2010夏	立命館大学	147	65	212
2011夏	立命館大学	198	73	271
2012冬	追手門学院大学	214	126	340
2012夏	立命館大学	304	123	427
2013春	岡山大学	239	70	309
2013夏	立命館大学	356	97	453
2014春	東洋大学	226	99	329
2014夏	京都産業大学	368	112	484
2015夏	追手門学院大学			
2016春	日本大学			

6年間で5大学から80大学へ

FDフォーラムと学生FD

- FDフォーラムではサミットの前から学生FDを取り上げ、その活動を紹介してきた。
- 2009.3　分科会「学生とともに進めるFD」
- 2011.3　ミニシンポ「学生とともに進めるFD」
- 2013.3　シンポジウム「学生とともに進めるFD」
- この間に、学生FDは全国に広がった。

学生FDと大学マネジメント

- なかには大学マネジメントの観点から学生FDに期待し、活動を支援する大学も増えている。
- 今回はその中から4大学に報告をお願いし、大学マネジメントと学生FDについて考えたい。
- 5年以上の活動実績のある大学から
  → 京都文教大学と追手門学院大学に
- 最近取り組みを始めた大学から
  → 島根県立大学と中京大学に

本日のプログラム（午前）

10:00～10:15　趣旨説明：木野
10:15～10:45　報告：島根県立大学看護学部
　　山下副学長、吾郷教授
10:45～11:15　報告：中京大学
　　安村副学長、安田課長
11:15～11:35　発表：京都文教大学・平岡学長
11:35～11:55　発表：追手門学院・川原理事長
11:55～　　質問・コメント票受付

本日のプログラム（午後）

13:30～13:50　報告：京都文教大学・村山課長
13:50～14:10　報告：追手門学院大学・梅村教授
　　・岸岡研究員
14:10～14:40　パネルディスカッション
14:40～15:20　会場全体での意見交換
　　学生からの発言や、学生FDの活発な大学からの発言も歓迎します。もちろん、フロアからも。
15:20～15:30　まとめ・閉会

参考文献

- 木野 茂［編著］（2012）
  大学を変える、学生が変える―学生FDガイドブック　ナカニシヤ出版
- 木野 茂［監修］　梅村修［編］（2013）
  学生FDサミット奮闘記　ナカニシヤ出版
- 木野 茂［編著］（2015予定）
  学生、大学教育を問う　ナカニシヤ出版
- 第18回FDフォーラム報告集（2013）
  シンポジウム②「学生とともにすすめるFD」
  大学コンソーシアム京都

看護学教育における大学マネジメントと学生ＦＤ

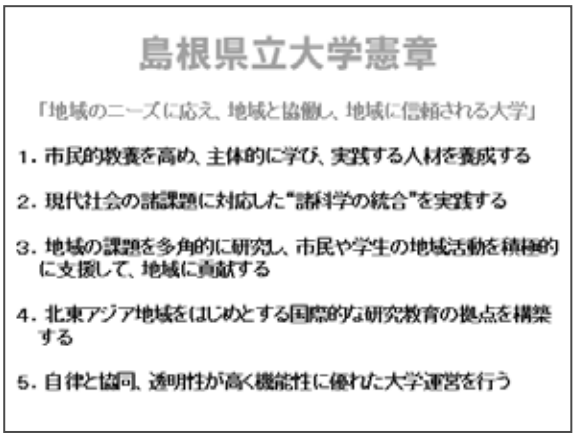
島根県立大学　副学長（出雲キャンパス担当）　山下　一也
島根県立大学　看護学部　教授　吾郷美奈恵

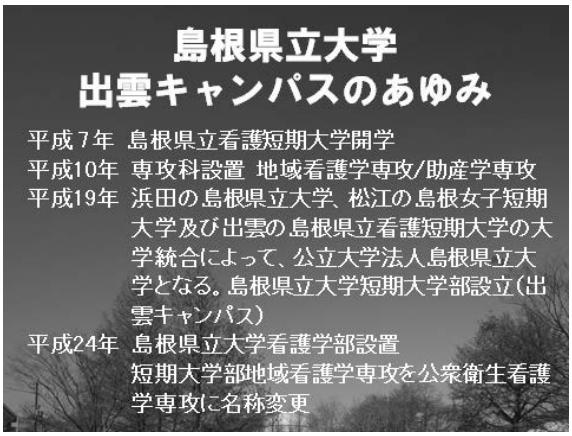
Ⅰ．看護学部における大学マネジメント

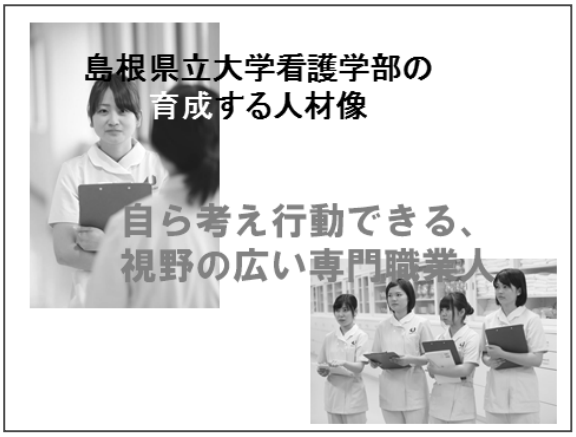
１．大学組織におけるＦＤの位置づけ

島根県立大学は平成19年に県立の３大学が統合・法人化し，出雲キャンパスは本部のある浜田キャンパスから100Kmの距離にあり，短期大学部がある松江キャンパスとは32Km離れている．大学組織の１つとしてＦＤセンターが設置されており，本部のある浜田キャンパスにＦＤセンター長，出雲と松江キャンパスにＦＤ副センター長が配置されている．また，出雲キャンパス（以下，本キャンパスと略す）の学生総数は約350名で，看護師，保健師，助産師を養成している．

本キャンパスは，前身である島根県立看護短期大学が開学した平成７年から，大学の常任委員会として「自己評価委員会」を設置し，学長が委員長を努めてきた．この当時から，授業アンケートを実施し，年報や自己点検評価報告書を作成するなど，ＦＤ活動に取り組んできた．







２．看護教育の現状

わが国では，保健師助産師看護師法に保健師，助産師，看護師の免許・資格と教育体制，守秘義務，処分や罰則などが定められている．教育内容と単位数は，保健師助産師看護師学校養成所指定

規則に示されており，遺漏のないようカリキュラムを編成しなければならない．看護師は３年以上の教育期間で，97 単位以上，保健師と助産師は１年以上の教育期間で 28 単位以上が必要である．また，看護師の専門分野Ⅰ・Ⅱと統合分野は看護師免許を持つ教員が担当する必要があり，「基礎看護学」「成人看護学」「老年看護学」「小児看護学」「母性看護学」「精神看護学」「在宅看護論」の７領域がある．

カリキュラムで重要な位置にある臨地実習は，３年生の秋学期に 10 名程度のグループがローテーションで領域毎に行っている．そのため，５単位の実習を行えば，朝から夕方まで延べ 50 週間の実習指導が必要となる．臨地実習中は，学内で講義・演習や会議などが無い限り臨地実習指導に出かけている．また，講義・演習の各科目が相互に関係し合っているため，他の科目の進度等に配慮して授業を進めている．このことからも，時間割や実習ローテーション表はとても重要である．一方，看護系の教員は，看護職の継続教育にも尽力しており，看護協会等の職能団体や各学会等で活動し，専門職としてのネットワークを構築している．

国家試験合格率は大学の評価となり，大学間で比較されるため重要視している．平成 27 年２月に実施された新卒者の国家試験合格率（全国平均）は，保健師 99.4%，助産師 99.9%，看護師 95.5%で，看護師は一般問題及び状況設定問題の他に必修問題（絶対基準が設定）が出題されている．また，就職は免許取得見込みによるの内定で，就職環境にも恵まれていることから，就職対策より国家試験対策が重要となっている．

看護系の大学はここ 20 年で急増し，現在は 234 大学（日本看護系大学協議会報告）と報告されている．このような背景から，大学教育に携わっている教員の多くは，専門学校で看護を学び，その後に学士を取得し，大学院に進学した現状にある．また，看護の教員は学歴，先に紹介した領域での教育研究業績，一般には５年と言われている臨床経験が求められる．

３．看護教育におけるカリキュラム・マネジメント

看護基礎教育においてカリキュラム・マネジメントの課題と考えているのは，「時間割」と「実習施設」との関係である．看護の授業科目は関係し合っているため，教員は時間割が決まると関係する科目のシラバスで進み具合を確認しながら授業内容を調整している．非常勤講師も多く，専任教員の看護教育として重要な必修科目を中心に組むことは難しい．また，実習は全ての受け入れ施設・機関との調整が伴い，その結果として実習のローテーション表が完成する．実習のローテーションと時間割は別物であるため，教員は実習初日のオリエンテーションやカンファレンスの調整に苦慮している．臨地実習指導者の理解と協力でなんとか調整している現状にある．

看護基礎教育における臨地実習はカリキュラムにおいて最重要であり，実習施設の変更は国に申請が必要である．また，臨地実習中の事故やハラスメントには実習施設・機関と連携・協働しない限り解決できないため，普段から良い関係を築いておく必要がある．一方，事務職員は実習ローテーション表を把握していないと学生に連絡が取れない．また，実習内容を理解していないと学生とコミュニケーションはとれず，相談にも対応できない．実習期間中は講義・演習や会議中も実習が

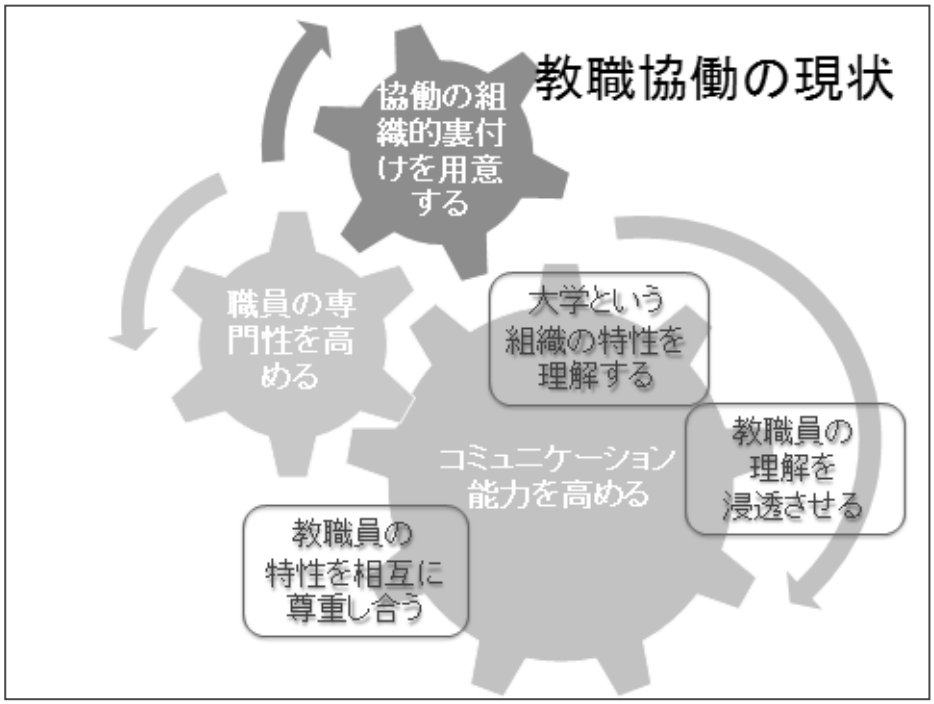
平行して動いているため，カリキュラムを熟知することで看護教員の言動が理解でき，適切なサポートが可能となる．

看護教育はその歴史的背景から，大学という組織の特性を理解する必要があるのは事務職員より教員側にあると思われる．一方，教員と事務職員が対等な立場で共同研究を行い，公表することにも重要な意味がある．今後は，事務職員にとっても研究活動が加点になるような評価とその仕組みづくりが必要と考えている．

Ⅱ．看護学部におけるＦＤ活動

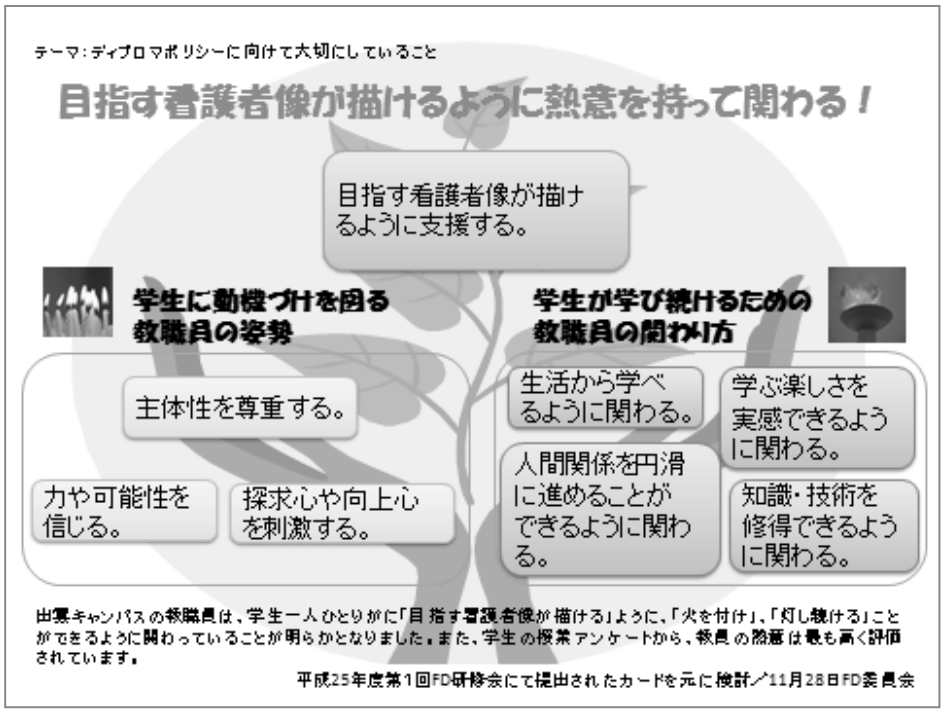
１．教職協働の現状

本キャンパスの教職協働を大学教育学課題研究 2008 年度～2010 年度の“ＳＤの新たな地平－「大学人」の能力開発に向けて－最終報告書”[1)]に示された新たな教職協働への条件である６つの留意点で整理し報告してきた[2)]．６つの留意点の関係は，「コミュニケーション能力を高める」ことで「大学という組織の特性を理解する」こととなり，「教職員の理解を浸透させる」ことができる．その結果，「教職員の特性を相互に尊重し合う」環境ができる．このサイクルがうまく回ることで，「職員の専門性を高める」こと，「協働の組織的裏付けを用意する」ことが可能となり，それぞれが密接に関係しあっていた．その結果，本キャンパスの教職協働は良好に機能していると評価できた．



平成 25 年度のＦＤ委員会においては，ディプロマ・ポリシーをテーマにＦＤ研修会を開催し，教職員が「ディプロマ・ポリシーに向けて大切にしていること」をラベルワークの手法を用いてまとめた．その結果，教職員は学生一人ひとりが「目指す看護師像が描ける」ように，学生に動機づけを図る姿勢として「主体性を尊重する」「力や可能性を信じる」，「探求心や向上心を刺激する」，学生が学び続ける関わり方として「生活から学べるように関わる」「人間関係を円滑に進めるように関

わる」「知識・技術を修得できるように関わる」「学ぶ楽しさを実感できるように関わる」を大切にしていた.



このまとめから，次年度は大学の FD に学生の視点を反映する取り組み（学生が主体的に教育や授業について考え，学生の視点から大学改革する動き）を教・職・学の三位一体で推進する必要について言及するようになった.

２．看護学部におけるＦＤ活動

本キャンパスおけるＦＤ委員会の主な活動は，今年度から「学生ＦＤ」を加え，７事業である.

FD活動	概要
授業アンケート	・講義と実習の2種類 （平成25年度に調査項目を見直し，平成26年度から変更） ・アンケートは25項目 [学生の受講姿勢](4項目)・[授業に対する感想](講義19項目，実習15項目)・[教員が任意に作成できる独自の項目]と自由記載欄 ・科目単位で担当教員が最終の授業で実施 ・記名式（平成26度から導入） ・平成25年度の実施率は，専任の科目100%，非常勤の科目93.2%
フィードバックレポート	・200文字程度のレポート ・専任教員の全科目が提出
FD研修会	・教職員を対象に毎年1～2回実施 ・平成25年度の参加率は教員88.6%，事務職員68.8%
授業参観	・専任教員全ての講義を参観対象 ・公開授業を授業参観に変更（平成26度から変更） ・平成25年度の実施率は教員75.0%
研究成果の共有 （平成25年度から）	・学会発表の共有：学会発表した研究結果を学内に1か月単位で掲示 ・研究成果報告：大学の研究助成を受けた研究成果の報告会を年度末開催 ・該当教員全員が協力
学生FD （平成26年度から）	・11名の学生FD委員が誕生 ・夏の学生FDサミット参加をきっかけに活動を開始
年報	・毎年度末に発行（ホームページにも掲載）

Ⅲ．学生ＦＤ誕生と活動状況

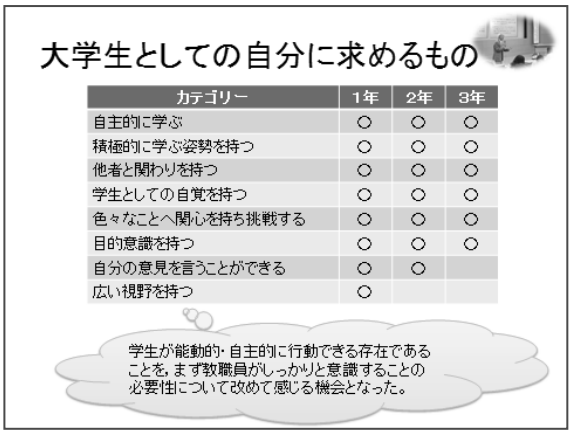
１．客員教授の特別講義

本キャンパス平成26年度の客員教授として木野茂先生（立命館大学共通教育推進機構教授）を迎え，5月に全学生を対象とした90分の特別講義「大学を変える，学生が変える」を開催した．受講後の調査では各学年ともに90%以上の学生が，講義に“満足した” “どちらかといえば満足した”，講義内容は今後に“活かせる” “どちらかといえば活かせる”と回答していた．また，80%程度の学生がＦＤ活動に興味・関心があると回答していた[3]．本キャンパスのこのような調査では自由記述欄の記載はまずないが，この特別講義は非常に多かったことから，自由記述を分析した．

自由記述欄の学生が考える「大学生としての自分に求めるもの」として，『“生徒”としてではなく“学生”としての自覚をもちながら，受動的ではなく能動的・自主的に講義やそのほかの学生生活に参画していきたい』という思いがあること，そして学生が能動的・自主的に行動できる存在であることを，まず教職員がしっかりと意識することの必要性について改めて感じる機会となった[4]．学生が考える「大学に求めること」としては，【学生が主体的に取り組むことができる環境】【学習しやすい環境】【教職員とのコミュニケーション】【学生の理解度に応じたわかりやすい授業展開】【学生FD制度の充実】【先輩・後輩とのコミュニケーション】【キャンパス外との交流の場】【専門職になるための知識・技術習得へ向けた支援】【充実したカリキュラムや授業内容】が明らかになった[5]．

また，学生を対象とした特別講義の後，教職員を対象とした60分のＦＤ研修会「学生とともに進めるＦＤ」（客員教授：木野茂先生による講演）を開催し，参加した全員が“満足した”，90%以上が“役立つ”と回答していた．

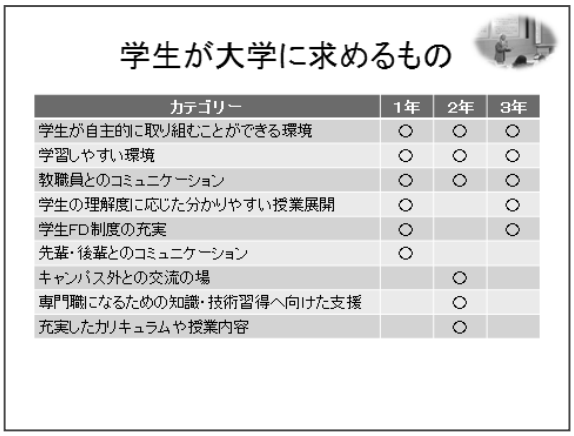
このように，学生や教職員の受講後の調査結果から，学生・教員・職員が一体となり，授業改善，教育改善に取り組んでいく仕組みづくりが本キャンパスの喫緊の課題であることが明かになった．



大学生としての自分に求めるもの

カテゴリー	1年	2年	3年
自主的に学ぶ	○	○	○
積極的に学ぶ姿勢を持つ	○	○	○
他者と関わりを持つ	○	○	○
学生としての自覚を持つ	○	○	○
色々なことへ関心を持ち挑戦する	○	○	○
目的意識を持つ	○	○	○
自分の意見を言うことができる	○	○	
広い視野を持つ	○		

学生が能動的・自主的に行動できる存在であることを，まず教職員がしっかりと意識することの必要性について改めて感じる機会となった。



学生が大学に求めるもの

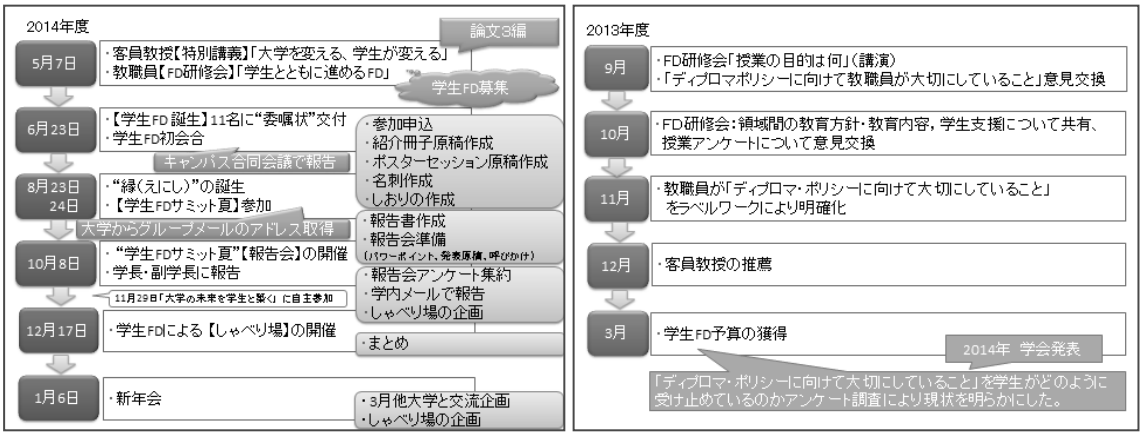
カテゴリー	1年	2年	3年
学生が自主的に取り組むことができる環境	○	○	○
学習しやすい環境	○	○	○
教職員とのコミュニケーション	○	○	○
学生の理解度に応じた分かりやすい授業展開	○		○
学生FD制度の充実	○		○
先輩・後輩とのコミュニケーション	○		
キャンパス外との交流の場		○	
専門職になるための知識・技術習得へ向けた支援		○	
充実したカリキュラムや授業内容		○	

２．学生ＦＤの誕生

特別講義受講後にメール等で学生ＦＤ委員を募集したところ，11名（３年次生３名，２年次生４名，１年次生４名）から自主的に申し出があった．この11名を学生ＦＤ委員として，6月23日にＦＤ委員会委員長名で委嘱状を手渡した．学生は本キャンパスの学生ＦＤを“縁～えにし～” と命

名し，「大学にとって縁の下の力持ちのような存在を目指す学生組織」をめざし“学生ＦＤサミット2014夏”（以下，“サミット2014夏”と略す）に参加することを目標に活動を始めた．

“サミット2014夏”に学生ＦＤ委員11名全員が参加し，その内容と感動を報告書としてまとめた．学生達の参加理由は，「学生生活をもっと楽しくしたい」「大学に楽しく通いたい」「もっと楽しい授業を受けたい」「学生の声を届けたい」「他大学生と交流したい」であった．



３．学生とともに進めるＦＤ活動

学生に”サミット2014夏”を通して「学生に求められるＦＤ活動」をテーマにラベルの提出を求めた．このラベルから「学生とともにすすめるＦＤ活動とは」をテーマにラベルワークを行った結果，「楽しく活動することで，大学を好きになり，学びやすく・働きやすい環境を創ること！」が導き出された．学生ＦＤ委員は，ラベルワークの図解を確認しながら，学生と教職員との交流の場として「しゃべり場」を企画・実施するなど，皆が時間をやりくりして楽しそうに活動している．

本キャンパスの学生ＦＤ活動は始まったばかりであるが，学生は過密なカリキュラム等で異なる学年で活動することは容易ではないが，昼に弁当を持って集まったり，学内メールやＳＮＳを活用して情報を共有しながら進めている．教職員は，学生から気づかされ学ぶことも多い．また，教育の質向上・発展にとどまらず，他大学との交流を通して，学生が主体的に「自大学にないものを学ぶ」「自大学の良さを発見する」貴重な機会となり，大学生活を有意義にするものであることを実感している．本キャンパスでは組織としての位置づけや予算等の課題も多いが，学生が集う場所も事務室から気持ちよく了解が得られた．半年を経過した今，学生・教員・職員が三位一体となって取り組む教育改善・授業改善に向けて歩み出したことを実感できるようになった．

看護学生は限られた時間の中で学ぶべき知識・技術は多くなり，カリキュラムは過密さを増している．教職員は，自ら考えて学ぶ余裕がなくなっている本キャンパス現状を打破したいと考えており，授業や教育の改善を目指して次の様な内容を学生ＦＤに期待している．

- ✧ 組織的に学生の意見や思いを提案・発信
- ✧ 学生・教員・職員が三位一体でディスカッションできる関係
- ✧ 教員に働きかけて授業の改善や活性化
- ✧ 学生に働きかけて授業に対する意識の向上（学生集団の自浄作用）
- ✧ 学生間で斜めの関係を構築
- ✧ 他大学を学び本学の良いところと改善点を提案
- ✧ 本キャンパスの活動が他のキャンパスに波及

今年度，ここまで取り組めた理由は，取組を始める前に，学生・教職員を対象に同じ内容の講義・研修で理解を求めたこと（きっかけづくり），副学長・事務室長の理解と協力（支援体制），中心となる教員の存在（推進体制）にあると考えている．本キャンパスの学生ＦＤをより強固なものとするためには，大学マネジメントの観点から必要性や位置づけを検討し，推進体制と支援体制を維持することが必要で不可欠ある．引き続き，他大学から学び続けながら，本キャンパスの学生ＦＤを醸成していきたい．

文献

1) 佐々木一也，他（2011）：大学教育学課題研究 2008 年度～2010 年度 ＳＤの新たな地平ー「大学人」の能力開発に向けてー最終報告書, 東京.

2) 吾郷美奈恵：看護教育におけるカリキュラム・マネジメントの課題―看護師養成課程におけるｅポートフォリオ・システムの運用に伴う教職協働の現状―，大学教育学会誌，35(1)，73-77，2013.

3) 藤田小矢香，長島玲子，平塚知子，松谷ひろみ，伊藤奈美，井上千晶，岡安誠子，小田美紀子，三原かつ江，吾郷ゆかり，別所史恵，松村憲樹，吾郷美奈恵：学生 FD に対する看護学生の興味・関心～特別講義「大学を変える，学生が変える」受講後の調査より～，看護と教育，5(1)，6-10，2014.

4) 松谷ひろみ，藤田小矢香，長島玲子，平塚知子，伊藤奈美，井上千晶，岡安誠子，小田美紀子，三原かつ江，吾郷ゆかり，別所史恵，松村憲樹，吾郷美奈恵：看護基礎教育課程で学ぶ学生が“大学生としての自分に求めるもの”～特別講義「大学を変える，学生が変える」受講後の調査～，看護と教育，5(1)，11-15，2014.

5) 平塚知子，藤田小矢香，長島玲子，松谷ひろみ，伊藤奈美，井上千晶，岡安誠子，小田美紀子，三原かつ江，吾郷ゆかり，別所史恵，松村憲樹，吾郷美奈恵：看護基礎教育課程で学ぶ学生が“大学に求めること”～特別講義「大学を変える，学生が変える」受講後の調査より，看護と教育，5(1)，16-20，2014.

学生ＦＤと大学マネジメント　～中京大学からの報告～

中京大学　副学長　　安村　仁志
中京大学　経営戦略室業務総括課担当課長　　安田　俊哉

＜報告概要＞

1．中京大学とは

○1954 年に大学を開学し、本年度が６０周年目にあたる。

○11 学部 11 研究科を持ち、学部学生数が 12,907 人（2014.5.1 現在）の総合大学。

⇒組織が比較的大きいため、多様な学生が集まる等のメリットがある一方、学部学科間等での意見調整等が必要となり、大学として統一した意思決定に時間を要するなど克服すべき点を抱えている。

○建学の精神：『真剣味（学術とスポーツの真剣味の殿堂たれ）』≒知育・徳育・体育

⇒「4 大綱（①ルールを守る②ベストを尽くす③チームワークをつくる④相手に敬意を持つ）」にて建学の精神のあり方を明示している。

○2014 年に中長期計画「中京大学ＮＥＸＴ10」を策定した。

⇒教育目標：自ら考え、行動することのできる、しなやかな知識人を育成し、自立した人間として社会に送り出す。

⇒この教育目標こそ、学生ＦＤ活動に通じる考え方となっている。

2．学生ＦＤ活動が始動するまで

○2007 年度の認証評価の助言をきっかけに、2009 年度に「中京大学ＦＤ委員会」を設置し、授業アンケートや公開授業等の教育方法改善に向けた組織的な取組みを開始した。

※当該委員会は本学史上初めて学長のもとに設置された委員会であり、学長ガバナンスが反映できる組織体として先駆けの役割を担った。

○2011 年に提出した認証評価の改善報告書にて“意欲的に取り組んでいる”との評価を受け、ＦＤ活動は基礎固めが出来た。

○大学のすべての者の幸せに向かってベストを尽くすＦＤ活動を実施するため、標語を「**Ｆ**ｏｒ　**Ｄ**ｏｉｎｇ　ｏｕｒ　ｂｅｓｔ」と定める。

○2012 年度にＦＤ活動の成熟を目指し、大学の主たる構成員である学生が加わったＦＤ活動を、以下のように新たに始動させた。

・名称：ＳｅａｒＣＨ（学生の声に耳を傾ける中京大学を目指し、**Ｓ**ｔｕｄｅｎｔ　**ｅａｒ**　**ＣＨ**ＵＫＹＯを略して学生が命名）

・人数：学生ＦＤスタッフ総数 50 名（2014.8.1 現在）
豊田キャンパスでも学生ＦＤが 2014 年度に発足（17 名）し、全学的に活動範囲が確保された。

・目的：学生が主体的に学びについて考え、全学的なＦＤ活動に貢献する。

・組織：学生主体の組織であるが、当面は、中京大学ＦＤ委員会内の協働部会が学生ＦＤ活動を支援（教員２名、職員６名）する。

・大学としての期待：

① より良い授業とより良い学びを学生とともに実現したい。

② 学生ＦＤ活動を通じ、主体的に考えて行動できるよう自己成長してほしい。

③ 学生と協働することで、ＦＤ活動が更に明るく、楽しく、前向きに推進され、大学全体が発展する一助としたい。

⇒学生のＦＤ活動への参加理由が上述内容とほぼ一致し、大学の期待と学生の想いが繋がった。

⇒学生の自主性を尊重し、教職員から押し付けずサポートに徹することとした。

3．学生ＦＤ活動の紹介

○2014 年度の活動ミッション

・学生ＦＤ活動が始まって実質的に 2 年目となるので“自立への一歩”の年とする。

・学生の立場から、大学は「何をすべきか」「何が出来るか」の提案が出るように。

○活動の 3 つの柱

① 授業内容の向上…授業方法等の改善に係る取組み

「学生ＦＤシンポジウム」

背景：授業アンケート結果や教員のコメントを毎年公表しているが認知度が低く、学生に充分その趣旨等が浸透しきれていない。

目的：ａ．授業アンケートの意味や効果を学生に正しく認識してもらう。

ｂ．授業アンケートに対し教員がどんなことを考えており、どう対応しているかを学生が知る。

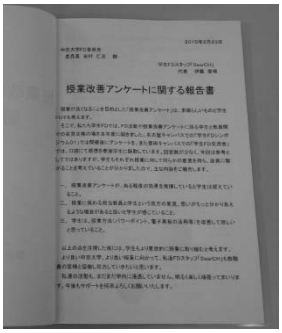
ｃ．学生が授業アンケートを身近に感じ、前向きに回答してもらう。

ｄ．授業アンケートに対し、学生が、今どう考えているかを大学に伝える。

内容：教員 3 名からの講演（テーマ「授業アンケートをどう捉え、どう活用しているか」）に続き、パネルディスカッション、質疑応答を実施。それらを通じてより良い授業アンケートのあり方について学生と教員合同で検討した。

効果：ａ．閉会後に参加者へ実施したアンケート結果をもとに、学生側が作成した報告書がＦＤ委員会へ提出された（写真参照）。

ｂ．参加した学生には、教員側もお互いの考えが分かり、また授業アンケートの狙いが理解できたため、大変良かったとの感想だった。所期の目的を果たせたため、継続して実施することで、より効果を高めていきたい。



② 学修環境の向上…授業を取り巻く環境の改善に係る取組み

「クリーンアップ作戦」

目的：落書きを消して授業環境をより良くするとともに、付随して発生する私語を減らすため（学生ＦＤスタッフは、授業中の私語に憂慮しており、既に書かれた落書きの横に書き足した新たな落書きをきっかけとして私語が始まる場合も多い点に着目し、この活動の実施に至った）。

内容：昼休みに教室の壇上から趣旨説明・協力依頼を説明したうえで、落書き消しを実施。一般の学生にも消しゴムを配布し、協力を要請する。

効果：ａ．多くの一般の学生が協力してくれるため、充分に授業環境を学生が良く

していくという趣旨を伝えることができた。

ｂ．当該活動を通じ、学生ＦＤスタッフに人前で話す度胸ややりがい、達成感が生じる。

③ 交流での気づき…学生間交流による学生の自己成長、能力向上に係る取組み

「名城大学とのしゃべり場」

背景：学生ＦＤサミット 2014 夏に参加し、良い影響を受けたとともに、他校のプレゼンテーション能力等の高さに圧倒され、とにかく今、自分達で出来ることから取り組みたいとの思いが学生の間に高まった。

目的：先ずは中部地区の他大学と交流を深めていく。その際、どのようなプログラムがふさわしいかについて検討する。

内容：学生ＦＤサミット 2014 夏の良かった点を出しあい、その点がより充実するためにはどのようなプログラム構成とした方がいいか、しゃべり場形式でグループワークを実施し、各グループでの結果を発表しあった。

効果：ａ．名城大学の学生と意見を共有できたため、更に多くの大学へ輪を広げていくための基礎が出来た。

ｂ．学生ＦＤサミットの良かった点として、ほとんどの学生は、意見交換が出来たことを挙げていた。加えて、より実りある意見交換とするためには、知識・知見を高めると同時にプレゼンテーション能力を高める必要があることが共有でき、自分達は次に何をすべきであるかという目標が定まった。

４．まとめ

学生ＦＤ活動を実施するにあたり、大学組織として想定した活動内容をあえて学生に示さず、学生の自主性に任せて教職員はサポートに徹した。しかし、２年間の活動実績を振り返ると、学生の活動内容と大学組織として想定した活動内容とがほぼ一致しており、「教 - 職 - 学協働」が成立していると実感した。今後も同じ方針で学生ＦＤ活動を進めていきたい。

＜ＦＤフォーラム開催中に会場にて頂いた質問と回答＞

（質問１）教職員の具体的な役割を知りたい。

（回答１）キャンパス毎に教員１名と職員３名のグループを構成し、キャンパス間も含め、常に相談しながら対応している。学生の主体性を重んじ、失敗も学生のいい経験との方針のもと、教員は議論が大きくずれた際の助言を主に行い、職員は学生ＦＤスタッフが気軽に話せる窓口役や、一般の学生団体との連携役などを担っている。また折々ＦＤ委員長が参加している。

（質問２）新たな学生ＦＤスタッフをどう募集していますか。

（回答２）学生主体に考えており、4 月には新入生向けとして、入学式や一般の学生団体との合同勧誘活動に参加して募集します。在校生向けとしては、別途チラシを朝や昼休みに配布します。

学生ＦＤと大学マネジメント

～中京大学からの報告～

副学長　安村　仁志
業務総括課　安田　俊哉

豊田キャンパス

名古屋キャンパス

【2014年度】
11学部…文・国際英語・国際教養・心理・現代社会・法・総合政策・経済・経営・工・スポーツ科
在学生数…12,907人(5/1現在)

ＦＤ活動【創始期】

2000年度　学長が「教育方法の改革」をテーマに
⇒①ＦＤ、②キャップ制、③他学部科目の聴講　等

2001年度　**「ＦＤ小委員会」設置**
⇒①ＦＤ懇談会の開催、②授業公開の施行、
③学生による授業評価、④講演会・シンポジウム
⑤教養部の経験交流会の共催・支援、　の開催、
⑥学生との懇談会の実施

2004年度　**「ＦＤ教育改革委員会」設置**
⇒①授業公開及び公開後の懇談会、
②学長・若手教員懇談会、③学生との懇談会、
④授業公開の点検　等

2

ＦＤ活動【創始期】

2007年度　**大学基準協会の認証評価受審**
教育方法に関する助言を拝受
・アンケート結果を生かした組織的取組みがなされているとは言いがたい。
・大学としての基本方針と、組織的取組みに関する具体的な再検討が必要である。

2008年度　自己点検・評価委員会のもとに
「ＦＤ検討委員会」設置

2009年度　**「中京大学ＦＤ委員会」設置**

3

現在のＦＤ活動【2つの特徴】

【特徴１】ガバナンスの意向の反映も意識し、はじめて学長の下に設置する委員会として発足。

中京大学ＦＤ委員会規程　2009年4月1日制定
（設置）
第１条　中京大学学則第38条に基づき、教育活動の質的向上及び発展を期して、ファカルティ・ディベロップメント（以下「ＦＤ」という。）活動の運営及び今後のあるべき方向を検討するため、**学長の下に**中京大学ＦＤ委員会（以下「委員会」という。）を置く。
（　以　下　略　）

本学史上初
（試行的要素を含む）

4

現在のＦＤ活動【2つの特徴】

【特徴2】3つの部会（下部委員会）を設置
・教職協働の合同チーム
・具体的課題(Mission)に焦点を絞り検討・実行

2009～2011年度　主な実施内容
・「授業アンケート」
・「シラバス」
・「公開授業」
・「ＦＤニュース（情報共有ツール）」　等

2011年　大学基準協会へ改善報告書提出
⇒「意欲的に取り組んでいる」

基礎固めを実施。一応のかたちが整った。

5

現在のＦＤ活動【第2期】

改めて理念に立ち返り、再度考えてみると…
そもそもの大目標：
『**明るいFD、アクティブなFD**』を目指す！
～本学の基本姿勢～
・ＦＤは、強いられて行うものではなく、なるべく明るく取り組みたい！
・『大学のすべての者の幸せのため』にある！

［教員・職員・学生］の幸せに向かってベストを尽くす

標語
『For Doing our best』

6

現在のＦＤ活動【第2期】

2012年度～　『ＦＤ活動の成熟』を目指す

・ルーティンワーク、数値化を超えるものは何か？
・ＦＤの新たなあり方、可能性は何か？
・直接的には教員の課題であるＦＤが、
　　学生・職員との協働に結び付くか？
・授業アンケートでは吸収しきれない、
　学生の意見や能動性を引き出す働きかけは
　何かないのか？

7

学生ＦＤ活動(ＦＤ第２期)

検証

〔当初からの想い〕
教職員が活動するだけでなく、学生も主体的な学びを行わなければならない。**成長**

＋

ＦＤ活動に対する学生の反応を知り、調和のとれたＦＤ活動としたい(モニタリング)。**Power**

＋

明るく、楽しく、前向きなＦＤ活動に学生が必要だ。

2012年度　学生参画型ＦＤについて

【学生の位置づけ】
学びの主人公だが、“神様”ではない。“神様”にしてはならない　⇒　教員・職員とともに「大学の学びを創る主体」である。

8

学生ＦＤ活動　2012年度 学生参画型ＦＤについて検討開始

【制度導入の趣旨】
学生が「より良い授業」と「より良い学び」の実現に向けて、主体的に考えて行動できる仕組みをつくり、教職員がそれを支援する体制（ＦＤ活動協働部会の下で）を整えることによって、学生視点でのＦＤ活動を全学的に展開する。

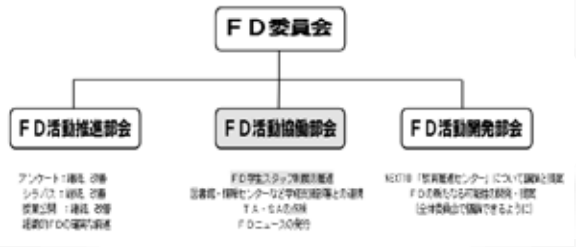
ガバナンスが学生から教わる。
①問題点
②どうあるべきか
特に気づいていないものについて

大学創りを
組織・教職員・学生が
協働して行い、
すべてが幸せになる。

9

学生ＦＤ活動　2012年度 学生参画型ＦＤについて検討開始

2014年度　ＦＤ委員会（下部部会）組織



10

学生ＦＤ活動　2012年度 学生参画型ＦＤについて検討開始

【名称】
中京大学学生ＦＤスタッフ
　ＳｅａｒＣＨ（サーチ）

学生の声に耳を傾ける
中京大学を目指し、
Student ear CHUKYO
を略して命名

【組織の目的】
学生が主体的に学びについて考え、
全学的なＦＤ活動に貢献する。

【組織の体制】
学生主体の組織とする。
将来的には、学生が自ら企画・立案・実行することを狙いとするが、発足当初は教員と職員が一定のサポートをする。

11

学生ＦＤ活動(ＦＤ第２期)

【スタッフ人数(2014.8.1現在)】
●学生_総数50名

	名古屋ｷｬﾝﾊﾟｽ_33名	豊田ｷｬﾝﾊﾟｽ_17名	⇒本年度初参入
１年:	4名	2名	
２年:	7名	2名	
３年:	13名	13名	
４年:	9名		

●教員_ＦＤ委員会ＦＤ活動協働部会員から2名
●職員_6名（業務総括課・教務課・学生支援室）

12

【当初想定された活動内容：大学側の立場から】

□Ｇｏｏｄ Ｐｒａｃｔｉｃｅ（推奨される授業）の発掘・取材・広報
□ティーチング・アウォード（教員表彰）の実施
□「良い授業」とはどんな授業か、教育方法の検討
□主体的学修を進めるための方法の考察
□授業での私語を低減させる方法の検討
□効果的学習を可能とする教室環境の考案
□他大学学生ＦＤ活動とのコラボ
□学内の広報媒体への寄稿
□「ＦＤ部会」「ＦＤ委員会」での意見発表・活動報告

⇒学生の自主性を尊重し、教職員側から押し付けない。
敢えて何も決めないことを決め、スタートした。

13

学生ＦＤスタッフの応募理由及び活動への想い

①-1 授業改善や学びに関する意見

（例）⇒主に学生の「私語」や学習態度に関する意見

●授業中に私語をしてしまう学生のやる気のない心を何とかしたい。

①-2 授業改善や学びに関する意見

（例）⇒その他

●教員と学生がｺﾐｭﾆｹｰｼｮﾝをとる授業について考えたい。

●授業に対して友人同士で「不満」を言い合っていても何も変わらない。きちんとした場所で、「意見」になれば何かが変わるかも知れない。

14

学生ＦＤスタッフの応募理由及び活動への想い

② 自己成長に期待する意見

（例）

●人前でしゃべるのが苦手。受け身ではなく、積極的に参加し、自身の意識改革、苦手克服を実現したい。

③ 大学の発展に貢献したいという意見

（例）

●こんな大きな大学で、自分の意見を反映させることができる活動はすごい。

●自分は所属する学部が大好きなので、同様に他の学生にも好きになって欲しいし、自信を持った学生が増えると良いと思う。

15

学生ＦＤスタッフの応募理由及び活動への想い	＝	学生ＦＤ制度導入の大学としての想い
①授業を改善したい。		①より良い授業と より良い学びの実現
②自己成長したい。		②主体的に考えて 行動できる
③大学が発展してほしい。		③全学的に展開

【学生ＦＤ制度導入の大学としての想い（再掲）】
学生が①「より良い授業」と「より良い学び」の実現に向けて、②主体的に考えて行動できる仕組みをつくり、教職員がそれを支援する体制（ＦＤ活動協働部会の下で）を整えることによって、学生視点でのＦＤ活動を③全学的に展開する。

16

大学マネジメントにおける学生ＦＤ活動の役割・期待

○より良い大学創りのため、教職協働だけでなく、学びの主体である学生自身だからこそできる発想・行動における爆発力を期待。

○学びの主体である学生視点で、教職員が気付かないような問題点や目標の提案を受ける。

○大学生活のひとつとしての学生ＦＤを通じ、自主的に活動できるよう自己を成長させてほしい。その延長線上に大学の成長があると、なお良い。

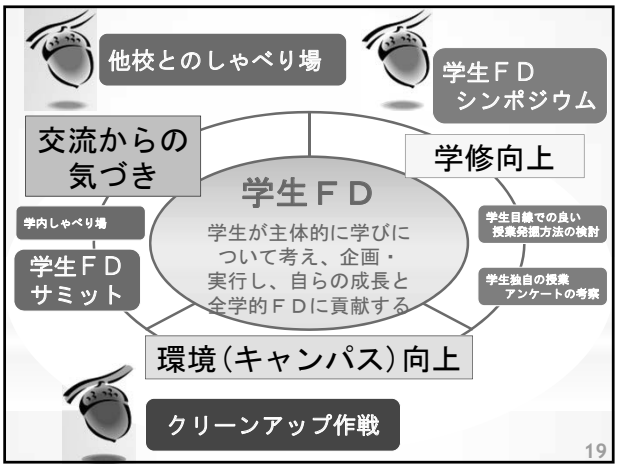
17

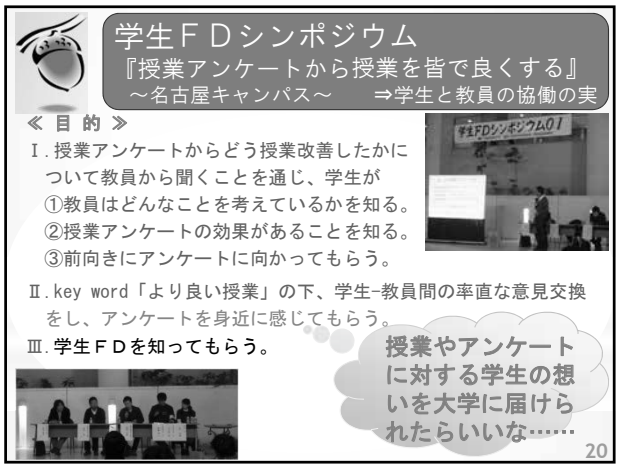
学生ＦＤ活動の具体的紹介

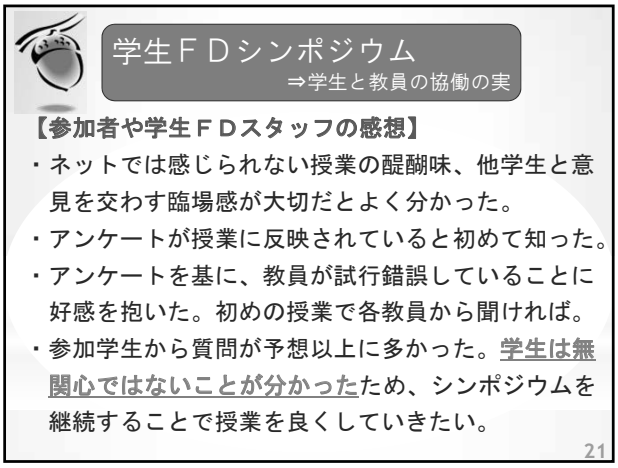
学生ＦＤスタッフ制度の2014年度ミッション

・教職員と高レベルで意見を交わし、大学全体のＦＤの前進に寄与できるようになる。また、学生のキャリアに繋がればとも願う。
・**自立への一歩**の年とする。
・学生の立場から【何が出来るか】【何をすべきか】の提案が出る。

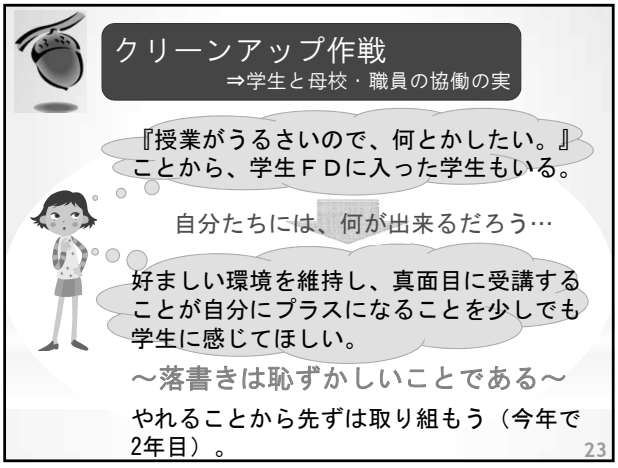
18

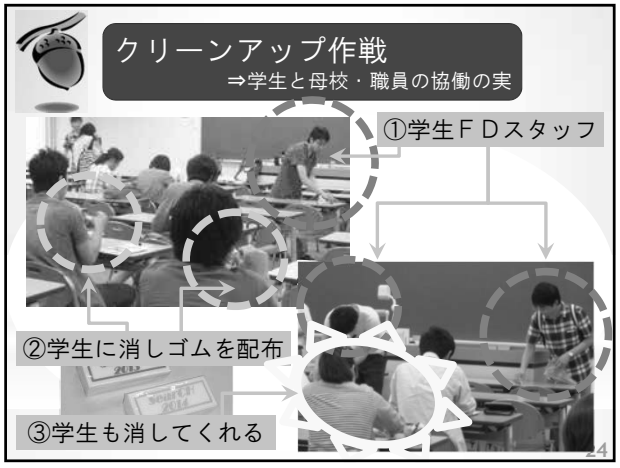

他校とのしゃべり場
学生ＦＤ
シンポジウム
交流からの
気づき
学修向上
学生ＦＤ
学生が主体的に学びについて考え、企画・実行し、自らの成長と全学的ＦＤに貢献する
学内しゃべり場
学生ＦＤ
サミット
学生目線での良い授業発掘方法の検討
学生独自の授業アンケートの考察
環境（キャンパス）向上
クリーンアップ作戦
19


学生ＦＤシンポジウム
『授業アンケートから授業を皆で良くする』
～名古屋キャンパス～　⇒学生と教員の協働の実
≪ 目 的 ≫
Ⅰ.授業アンケートからどう授業改善したかについて教員から聞くことを通じ、学生が
①教員はどんなことを考えているかを知る。
②授業アンケートの効果があることを知る。
③前向きにアンケートに向かってもらう。
Ⅱ.key word「より良い授業」の下、学生-教員間の率直な意見交換をし、アンケートを身近に感じてもらう。
Ⅲ.学生ＦＤを知ってもらう。
授業やアンケートに対する学生の想いを大学に届けられたらいいな……
20


学生ＦＤシンポジウム
⇒学生と教員の協働の実
【参加者や学生ＦＤスタッフの感想】
・ネットでは感じられない授業の醍醐味、他学生と意見を交わす臨場感が大切だとよく分かった。
・アンケートが授業に反映されていると初めて知った。
・アンケートを基に、教員が試行錯誤していることに好感を抱いた。初めの授業で各教員から聞ければ。
・参加学生から質問が予想以上に多かった。学生は無関心ではないことが分かったため、シンポジウムを継続することで授業を良くしていきたい。
21

ＦＤ委員会に学生ＦＤが
活動報告を実施
参加学生へのアンケート
（名古屋キャンパス）
参加学生へのアンケート
（豊田キャンパス）
2015.2.23
中京大学ＦＤ委員会
ＦＤ委員会報告会
↑ＳｅａｒＣＨが
年間活動報告を実施
初
サロン（情報交換会
↑教職員と学生ＦＤ
スタッフとの交流
初
↑アンケート結果を、
ＦＤ委員長に具申
初


クリーンアップ作戦
⇒学生と母校・職員の協働の実
『授業がうるさいので、何とかしたい。』ことから、学生ＦＤに入った学生もいる。
自分たちには、何が出来るだろう…
好ましい環境を維持し、真面目に受講することが自分にプラスになることを少しでも学生に感じてほしい。
～落書きは恥ずかしいことである～
やれることから先ずは取り組もう（今年で2年目）。
23


クリーンアップ作戦
⇒学生と母校・職員の協働の実
①学生ＦＤスタッフ
②学生に消しゴムを配布
③学生も消してくれる
24

クリーンアップ作戦
⇒学生と母校・職員の協働の実

【学生の振り返り】

・教室にいる学生に明るく働きかけた場合、積極的に協力してもらえ、ねぎらいの言葉も今年初めて受けた。
・最初に壇上で趣旨説明をしっかりしないと学生の協力度合いが下がってしまう。
・「大学を大事に使っていきましょう。」と声をかけたら、そうねという返事とともに、一緒に消してくれた。

⇒昨年より反響大きい。継続して実施しよう。
⇒今後の活動でも、笑顔で明るく恥ずかしがらず。
⇒雰囲気づくりをきちんと行う。

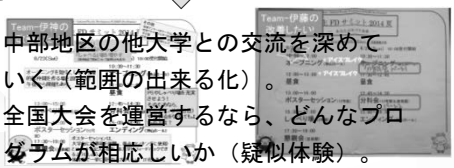
25

名城大学とのしゃべり場
⇒学生どうしの協働の実

学生ＦＤサミットに刺激を受けた。

・全国の学生の幅広い考えに驚いた。
・運営大学のレベルの高さに驚いた。

今の自分達にできることから…



・中部地区の他大学との交流を深めていく（範囲の出来る化）。
・全国大会を運営するなら、どんなプログラムが相応しいか（疑似体験）。

26

学生の感じたこと、考えていたこと

知り合いが増えて視野が広がった。先ずは気軽に中部地域の学校と継続して交流するのがいい。

毎年、新メンバーが入る。学生ＦＤの新境地発見も大事だが、今までやってきたプログラムを継続させることも大事！

「しゃべり場」で影響を受けた。聞くではなく、話す時間がもっと多くあってほしい。

考えれば考えるほど、主催校の学生のたくましさを感じた。イベントスキルがまだないが、卒業までに実現出来たら嬉しい。

しゃべり場頂上決戦【ベテラン学生のしゃべり場】を聞いてみたい。

27

【当初想定された活動内容：大学側の立場から】

☐Ｇｏｏｄ　Ｐｒａｃｔｉｃｅ（推奨される授業）の発掘・取材・広報
☐ティーチング・アウォード（教員表彰）の実施
☑「良い授業」とはどんな授業か、教育方法の検討
☐主体的学修を進めるための方法の考察
☑授業での私語を低減させる方法の検討
☐効果的学習を可能とする教室環境の考案
☑他大学学生ＦＤ活動とのコラボ
☑学内の広報媒体への寄稿
☑「ＦＤ部会」「ＦＤ委員会」での意見発表・活動報告

⇒行動面からみても、ベクトルが同じ方向。
「教－職－学協働」が成立している。

28

学生ＦＤ活動の今後

・明るいＦＤ、アクティブなＦＤか？
⇒学生ＦＤスタッフはキラキラしている。
（新たな意見との出会い、実施体験）

・自立して全学的なＦＤ活動に貢献する
⇒今、出来ることから取り組み始め、漸進中。
プラス方向に進展してほしい。その先には、教職員では考え付かない提案があると面白い。

・教職員のサポート
⇒必要も、当初に比べ内容が徐々に高度に。
⇒自主性を尊重し、待ち、促し、助言するより、教職員が当初おぜん立てし、学生がなぞる方がいいのではとの思いは常にある。

29

学生ＦＤ活動の今後

・キラキラしているものの・・・
⇒企画提案者だけでなく、スタッフ全員で実施にあたり、一体感の醸成を期待。

・自立に向けて・・・
⇒年間行事が固定化されてきた。個々から新企画が卒業までに挙がることを期待。
⇒5W2Ｈの含まれたスケジュール管理を徹底し、早めに情報共有する。
⇒積極的にアクションを起こす。
百聞は一見に如かず。　　等

30

京都文教大学における学生 FD と大学マネジメント

京都文教大学　学長　　平岡　　聡
京都文教大学　教務課長　　村山　孝道

第20回FDフォーラム分科会
「学生FDと大学マネジメント」

京都文教大学における学生FDと大学マネジメント

2015年3月1日
京都文教大学
学長　平岡　聡

1

大学の紹介①

- 大学の創設は1996年（京都文教学園の創立は1904年）
- 仏教系（浄土宗系）の大学
  建学の理念（仏教精神）四弘誓願
  →菩薩の精神→自利即利他→共生（ともいき）

2

大学の紹介②

- 宇治市に唯一本拠を置く大学
- 小規模の文化系私立大学
- 教育の特徴･･･現場教育
- KBU学士力の策定

3

4

大学の紹介③

- 「地（知）の拠点 (COC) 事業」に京都の私立大学で唯一の採択

5

教育活性化の戦略　：　共生効果を生む

- 地域と大学の共生効果を生み、「ともいきキャンパス」を創出
- 座学と現場実践教育の共生効果
  →KBU学士力のゴール「社会的価値（ともいき）創造力」を育成
- 教員・職員・学生の共生効果で大学に新たな風を生み出す

6

戦術（1）：年次別の段階的科目配置

1年次：「京都文教入門」（共通科目・1年次必修）
→ 教職学の三者で新入生に「一歩踏み出す」気持ちを涵養
2年次：現場実践科目（共通科目・選択必修）
→ プロジェクト科目・ボランティア科目・インターンシップ科目
→ 実際に一歩踏み出し、社会と接点を持つ
3年次以上：専門科目の中でさらに教育（学部に任せる）

7

戦術（2）：学生の力を活用

- 「京都文教入門」の授業改善・学生が企画・運営するコマの提供
  → 教職学の共生効果を生み出す
- 学生FD、SA (Student Assistant) 、SSA (Super Student Assistant) の活用
  → 「準正課領域」で教職学の協働の仕組み
  → 学生の参加を促し、多様な能力を育成する

8

戦術（3）：COC事業の活用

・COC事業の補助金を利用
→ 地元とのネットワークを強化
→ 現場教育のフィールドをさらに拡大

・COCのネットワークを利用
→ 異世代人との交流を促す「他流試合」に学生を送り込む

9

成果（1）：初期

- 「京都文教入門」受講生の満足度が飛躍的に向上
- 「京都文教入門」への学生と教職員の関与が増加
- 学生自治会へ1回生が大量に参加
- 新設団体活況
  - ノートテイカーサークル、設立からいきなり40人超え

10

成果（2）：最近①

- 学内の様々な研修が定型化
  → チームビルディング、ファシリテーション、プロジェクトマネジメントなど
- 新たな課外の恒例行事が誕生
  → 3 on 3 大会・フットサル大会・体育祭、また国際交流イベントなど
- 学生主体の行事
  → プロジェクト科目の合同成果発表会やSA研修会の運営など

11

成果（2）：最近②

- 「他流試合」に参加する学生の増加
  → 学生FDやUNGLなど
- SSAを経験した学生の活躍
  → 最高賞である京都府知事賞を受賞
  (第10回京都から発信する政策研究交流大会)
- プロハピョクルーズ学生、卒業論文発表会プレゼン部門最優秀賞、ポスター部門優秀賞受賞

12

成果が上がった要因①

- プラットフォーム機能（「京都文教入門」）の確保
  → 全学生にアプローチでき、各種事業への導引が可能
- 自校教育の特性･･･態度（モチベーション）の涵養
  → 職員や学生に任せることができ、様々な試行錯誤が可能

13

成果が上がった要因②

- 組織的支援

①FD委員会のもとに学生FD組織を位置づけた
→ ヒト・モノ・カネの支援体制の整備

②UNGLの大学間連携GPに参加
→ 学生の研修にかかる活動費を捻出

③職員のSDとして活用
→ 学生のFD活動を支援してくれる職員の増加

14

課題

① 学生や職員に比べ、教員の関与がまだまだ少ない

② 正課教育の上級年次プログラムは各学部次第

③ 成果の測定ができていない

④ 受験生の増加や大学への貢献度アップに対する効果が不明

15

学生FDへの今後の期待

今日の大学は、教員や職員が学生をコントロールする、あるいは出来る時代ではない。

大学の価値を教員・職員・学生の三者で共に創造する「ともいきキャンパス」が、建学の理念に照らして、私の思い描く本学の理想像である。

学生FDを引き続き支援し、育て教員・職員・学生の共生効果で大学に新たな風を生み出す核となってくれることを期待している。

16

第20回FDフォーラム分科会
「学生FDと大学マネジメント」

FSDプロジェクト、6年弱の経験から見えてきたもの

2015年3月1日
京都文教大学
課長　村山孝道

17

18

「こうあるべきだ！と教務課長からいくら言われてもしっくり入ってこなかったけどこんな感じで話す『場の力』でスッと自然に入ってきました。楽しかったです。またやりましょう！！」

（2015/02/5　於；教職学しゃべり場
教務部長の閉会の挨拶より）

「この職場に転職して正解だと確信しました。」

（某日　於；公開しゃべり場
転職間もない某職員）

19

■目次

- ６年弱の経験から見えたもの
- FSDプロジェクトのご紹介
- 教務課が支援している教育領域に近い学生活動
- FDと学生FDの関係
- 学生FDの特徴
- まとめ

20

■６年弱の経験から見えたもの

- 「市民権」を得るのに2～3年はかかる
- 小さく産んで大きく育てたことで素直に受け入れてもらえた
- 教職員が伝えるより学生が伝えたほうが素直に伝わりやすい（対学生、対教員、対職員）
- 学生FDの定義の抽象度が高いことを強みにできる（プラットフォームになる）

21

- 大学の教職員は基本的に良い人が多い。学生FDなどの活動に参加する学生も良い奴が多い。
- 学生たちの健気で真摯な態度は大人たちをエンパワーメントする。（テコでも動かないような人がスッと変わったりすることを目撃する。
- インフラを整え、邪魔さえしなければ、数年経てば学生は自分たちで何でもやる。

22

- 一円にも、一単位にもならないからこそ今まで続いている。
- 教員と職員だけが議論し、良かれと思って行う施策の中には学生目線から見れば「片思い」で上滑りしたプランがまだまだあることは否めない。
- 例えば、「会議」ではなく「テーマ」を設定し、「結論」ではなく「プロセス」を成果物とすると、本当に和気あいあいと、本音トークが出来、利害を取っ払った対話が生まれる。

23

■FSDプロジェクトの紹介

- ２００９年６月１０日発足
- 学生約２０名
- キャッチフレーズ
  「京都文教大学を元気に」
  「京都文教を学費以上に使い切る」
  「フェスタ感」

24

第３分科会

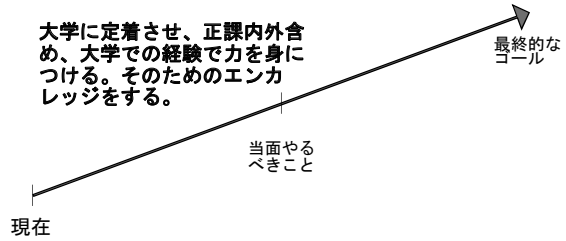
活動概要

P.4〜P.5

25

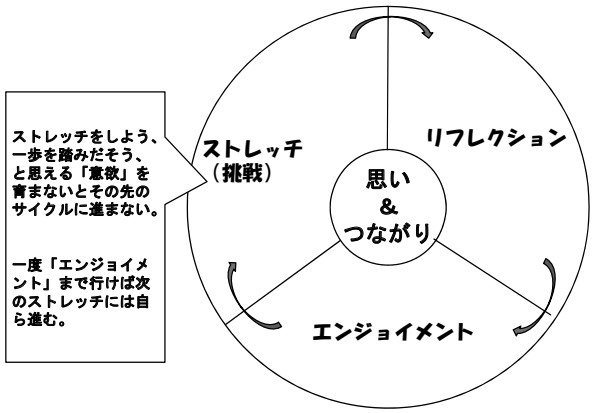
■ゴール

①学生を育成し
②自信をもって輩出し
③社会に貢献し
④新たに若者が入ってくる



28

26



出典：松尾睦2011

29

27

■「ストレッチ」を促す例

「京都文教入門」
初年次必修、モチベーション涵養

2009年開設当初は役職者輪番、学生・教員双方の満足度低

2010年より学生が関与。満足度が向上。
50%前後　→　70%~90%超

30

- 定着（Settle）
- Away　から　Homeへ
- 「（授業も含めて）学費以上に京都文教を使い切る」

どの道を選んだか
↓
その道をどう歩んだか

31

■教育に近い領域で教務課が支援している活動

▷FSDプロジェクト
▷SSA
▷プロハピョクルーズ
▷UNGL

34

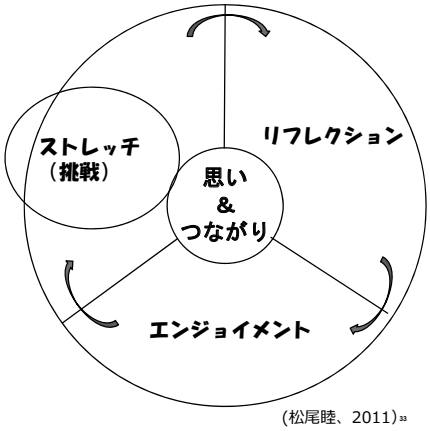
- 「全然知らなかった。いい大学ですね。」
- 「京都文教を誇りに思う」
- 「この大学を好きになった」
- 「先輩のような大学生活を送りたい」
- 「今のままじゃだめだと焦った」
- 「何もしないという選択肢だけは取らないことに決めた」

（京都文教入門コメントカードの感想より）

■教務課が支援している活動

名称	活動範囲	特徴
1.FSDプロジェクト（学生FD活動）	大学の教学改善全般。自校教育の企画・立案・運営など。高校生への大学紹介など、「アンバサダー」としても。	自由な発想で大学の改善を提案・実施する。学生向け、教職員向け各種研修の企画。
2.SSA（スーパーSA）	SAの説明会、中間報告会、振り返り会、ファシリテーション研修の企画・立案・運営。	”有給”のSAを”無給”のSSAがトレーニングする！
3.プロハピョクルーズ	PBL科目合同成果発表会（2回生選択必修）の企画・立案・運営。	”有単位”の発表会を”無単位”のスタッフがプロジェクトを組んで華々しく運営する！
4.UNGL（大学間連携協働教育推進事業の学内組織）	グローバルリーダーシップ養成。各種説明会、研修プログラムの企画・立案・運営など。	海外での教育実習、無人島サバイバルキャンプをはじめ多数のプログラムを学内に紹介し、自らも参加。独自に事前トレーニングなどを実施。

35



(松尾睦、2011)33

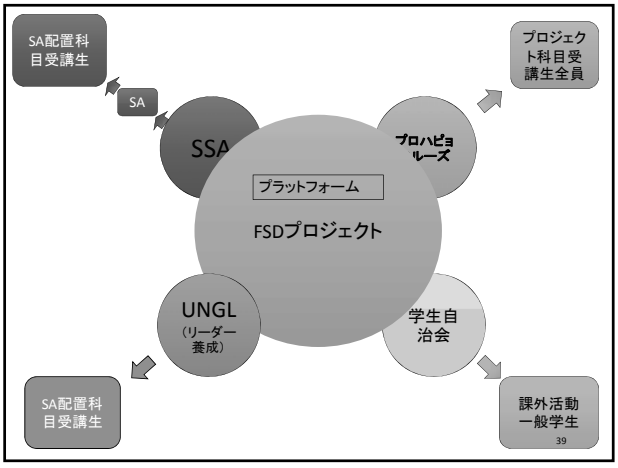
■FSDプロジェクトのプラットフォーム機能

- FSDの学生が兼務でSSA、プロハピョクルーズ、UNGL、学生自治会などに存在。
- FSDはどこよりも大学の教職員と繋がり、組織的裏付けもある。
- ファシリテーションやプロジェクトマネジメントなどのスキルのトレーニングを定期的に受けている。
- 他大学とのコネクションがある。

37

- 誰よりもハードルの高い場での経験値が有る。
- 様々な「出番（試合）」があり、そのためのリハーサル（練習）を経験している。
- 正課のなかでも（ゼミやプロジェクト科目等で）学生FDの学生が他者に好影響を与えている。

38



39

■FDと学生FDの整理

- FD＝Faculty Developmennt
- Facultyをモチベートすることを通じ、結果としてDevelopmentにつなげる学生の活動が学生FD
- 職員や学生、教育領域以外も含め、個人の成長を軸にし、大学全体を結果としてDevelopmentする活動をFSD

40

■F.ハーズバーグの「二要因論」にあてはめた学生FD活動の特徴

衛生要因	組織・人	・国の政策によりFD促進の力学が働いているという背景がある。 ・専従・兼務の別はあるが、FD主担当の教職員が配置され支援体制が強まっている。
	資金・物品	・大学組織の活動であることから予算がつく。 ・教職学協働であることから施設、物品借用、臨時の予算など一般の学生団体と比較して恵まれている。
動機付要因	強み・魅力	・大学のミッション（教育・研究・社会貢献）そのものへの直接的関与（大義への関与）である。 ・大学の組織活動であり、教職学協働であることから取り扱う事業の規模が大きく、華やか。大きな目的、自己の成長がある。

41

◆**モチベーション3.0**　**（D.Pink，2013）**

モチベーション（内発的動機）の源泉の３要素。

自律性（Autonomy）

- 他の誰でもなく、自分が自分の行動を決定出来る
  ↓
- 裁量権限がある（自己決定感）

熟達（Mastery）

- 知識・技能・態度のすべて又はいずれかが伸び、その実感がある。
  ↓
- 成長実感がある（自己肯定感）

目的（Purpose）

- 自らの行為を「カネ」や「単位」ではなく高い目的と認知できる。
  ↓
- 利他感がある（自己有能感）

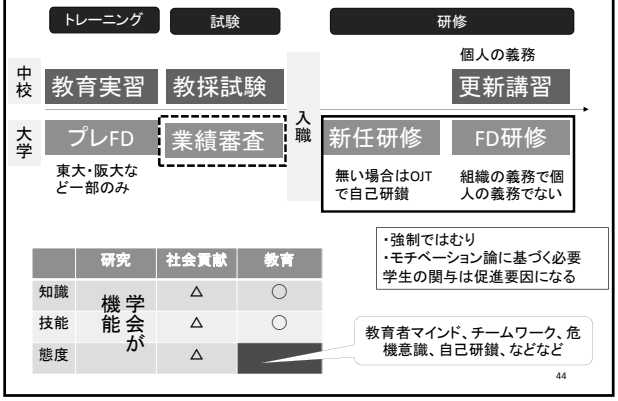
42

■モチベーションを阻害する要因

定義	要因	阻害要因
自律性	自らの行動を自らが決定できる	教職学協働とは名ばかりで、学生に決定権、裁量権が無く、実際は教職員が重要な事項は全て決定している場合。
熟達	成長を実感する機会があること	「理論」の研修機会がなく、実践のみで、リフレクションもなく、組織としても個人としても成長しない場合。
目的	より大きなものへの貢献がモチベーションをあげる。「目的の駆動力」	ミッションが共有・維持・継承されず、「楽しければいい」など目先の目的に矮小化した場合。また、即物的な「成果」を求めるあまり近視眼的目的に終始する場合。

43

■FDの範囲



44

■まとめ

- 「スタンダード的」なFD活動にしても、「態度」に関わる領域はモチベーションアップ抜きには達成できない。
- 「態度」の領域のFDには「学生FD的」な活動が効果を示す。
- そしてそのこと自体が学生自身の成長も促す。
（自利即利他　= Win × Win）
- プラットフォーム化できるのは抽象度の高さによる（抽象度の強み）

45

「こうあるべきだ！と教務課長からいくら言われてもしっくり入ってこなかったけどこんな感じで話す『場の力』でスッと自然に入ってきました。楽しかったです。またやりましょう！！」

（2015/02/5　於；教職学しゃべり場
教務部長の閉会の挨拶より）

「この職場に転職して正解だと確信しました。」

（某日　於；公開しゃべり場
転職間もない某職員）

46

期待感♪

47

ご清聴、ありがとうございました。

京都文教大学
村山孝道
t-murayama@po.kbu.ac.jp

48

第3分科会

学生のために、大学を変える

学校法人追手門学院　理事長　　川原　俊明

2014年度
第20回　FDフォーラム
学修支援を問う

――何のために、何をどこまでやるべきか――

学生のために、大学を変える

2015年3月1日

学校法人　追手門学院
理事長　川原　俊明

自分史上、
想像以上！

追手門学院大学

主催　大学コンソーシアム京都

木野茂先生信奉者の私

川原俊明

「大学を変える、 学生が変える」

座右の書

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
1
追手門学院大学

2009年からの「学生FDサミット」

■大学像

象牙の塔 → より広範囲な人材育成機関

■学生像

受け身の学生 → 学生の主体的な学びの確立

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
2
追手門学院大学

2012年冬　追手門サミット

■第5回学生FDサミット■

全国56大学から340名の参加

さらに
2015年夏には
再び　追手門サミットを開催します！
多数のご参加を！

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
3
追手門学院大学

大学を変える、 学生が変える
↓
学生FD活動に共鳴
↓
大学も、自ら変わらねば・・・

――学生の声に耳を傾けて――

大学は、学生のためにある
大学は、大学教員や教授会のために存在するものではない

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
4
追手門学院大学

大学ガバナンス改革

■2014年6月　学校教育法の改正

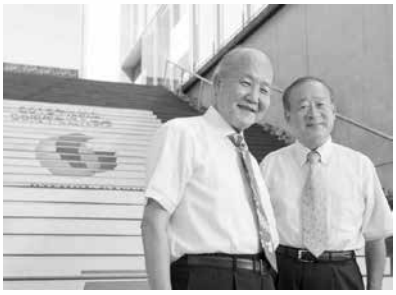
一年前の

追手門学院では、2013年6月に
「教授会の学長諮問機関化」を実現

大学ガバナンス改革は、学生のための教学改革に繋げなければならない

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
5
追手門学院大学

改正学校教育法によるガバナンス改革の行く先



© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
6
追手門学院大学

教授会のグループワーク化

学部長補佐を教授会正式メンバーに

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
7
追手門学院大学

入試改革の実現　アサーテイブ入試の導入
大学教育再生加速プログラム入試改革部門で、私学で唯一採択

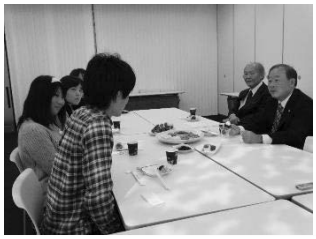
© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
8
追手門学院大学

カリキュラムポリシー作成

全大学教員のグループワークを実現

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
9
追手門学院大学

理事長・学長と学生とのランチミーティング



© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
12
追手門学院大学

理事長・学長と職員とのランチミーティング

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
13
追手門学院大学

理事長・学長と大学教員との面談

大学を変える、学生が変える

―― 風通しのいい大学に ――

学生のために大学を変える

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
14
追手門学院大学

追手門学院大学のさらなる改革を拓く

■さらなる教授会改革へ

《具体的な提案》

1. アクティブラーニングの導入
2. 座席表の作成
3. 小テスト、宿題等の積極的な授業内活用
4. 抜き打ち的な出席をとる
5. 授業の最初に掲示内容の趣旨説明
6. TA導入
7. 新入生演習の改革
8. 出欠を授業の前後にとる
9. 教室の作り替え（縦長から横ワイドに）
10. 全教員で私語撲滅に取り組む

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
15
追手門学院大学

ご清聴ありがとうございました

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2015 All rights reserved
17
追手門学院大学

追手門学院大学の学生 FD 活動紹介

追手門学院大学　基盤教育機構長　梅村　修
追手門学院大学　教育開発センター　研究員　岸岡奈津子

2015年3月1日
第20回FDフォーラム分科会
「学生FDと大学マネジメント」
（於：同志社大学 今出川キャンパス良心館）

追手門学院大学の学生FD活動紹介

追手門学院大学　基盤教育機構
機構長　梅村　修
追手門学院大学　教育開発センター
研究員　岸岡 奈津子

追手門学院大学

大学を変える、学生が変える

© OTEMON GAKUIN UNIVERSITY 2014 All rights reserved

追手門学院大学

追手門学院大学
学生FD活動の軌跡
2009年度～2013年度

追手門学院大学

Best Teacher Award

「研究室訪問」
「教員インタビュー」

「追大教員図鑑」

「学生発案型授業」

「学生FDのWA!!!!!!」

活動報告冊子
「エフモン・クエスト」

こうした学生FD活動は、
追手門学院大学に、
どんな変化をもたらしたか？

追手門学院大学

1. 学生FD活動は、教職員の会議体のあり方を変えた。

1. 学生FD活動は、教職員の会議体のあり方を変えた。
2. 学生FD活動は、学生をみる教職員のまなざしを劇的に変えた。

1. 学生FD活動は、教職員の会議体のあり方を変えた。
2. 学生FD活動は、学生をみる教職員のまなざしを劇的に変えた。
3. 学生FD活動は、少人数・双方向・参加体験型の協働学習の場を広げた。

少人数、双方向、参加体験型の協働学習～表現コミュニケーション、教養ゼミ、プロジェクト・・・

追手門学院大学
ガバナンス改革の軌跡
2009年～2013年

追手門学院大学

追手門学院大学の主なガバナンス改革
～学生を元気づける大学をめざして、学長のリーダーシップを確立

- 2012年4月
  - 大学教育研究評議会を設置
  - 学部長選考規程を制定
- 2012年11月
  - 学部長補佐規定を制定
- 2013年1月 2013年7月
  - 学長選考規程を制定
  - 各学部教授会規程の改正

追手門学院大学

追手門学院大学
学生FD活動の軌跡
2014年度

追手門学院大学

SCOT　オブザベーション・レポート（授業観察記録）　12月1日　　チーム　　木村、小西

時間	教員のふるまい	学生のふるまい	SCOT生の所感
15：00～ ：15～ ：43～ ：48～ ：55～ ：00～ 16：26 ：26～ ：30～	アンケートを配布しつつアイスブレイクを行う。 学生に前回の宿題を黒板に書くように指示。 学生に前に書いた答えを発音させる。 授業へ入る。 韓国語の数字に関する事を説明&聞いてもらうために韓国語の曲を流す。（12時30分という曲） 教科書へ、学生に問題を出す。 教科書の説明。 授業終了。 来週の内容の説明。宿題の指示。アンケート回収。 残っている学生に授業の内容を軽く復習。	先生の会話に答えつつアンケートを行う。 自分がどの問題を寸るのか忘れていたので混乱していた。 黒板に解答をバラバラに書く。 前に書いた答えを発音する。 主に後ろのサイドの席の人が私語(授業に関係の無い話)をしている。真ん中の席は静か。 曲を聴いている時も私語(サイドの席) 学生が出された問題を答える。 学生がノートを取る。 ・その他 席にかなり余裕があったので、もう少し席を指定した方がいいと思いました。 席替えは宿題の順番に前から座らせるのもいいと思いました。 先生から見て左後ろの席がずっと私語していました。	15：00～ アンケートを「いつ」やるか指定していなかったので、学生がざわついていた。 アンケート配布の流れで授業へ移行したので学生に落ち着きがなかった。→アンケートは授業の最後に配布したほうがよかったのではないでしょうか。 ：15～ 前回の宿題を「誰が」「どの」問題をやるか先生が把握していなかったように感じました。 先生があらかじめ、黒板に書く場所を指定すれば答えも見やすいし、誰が問題を書いていないか先生と学生が把握しやすいと思いました。 他の学生が黒板に書いている途中に学生に発音させていたので、書いている途中の学生は説明が聞けない。 ：48～ 曲の説明不足だと感じました。 これ知っている？ではなく、この曲知っている？などの方が分かりやすいと思います。 16：00～ 私語がかなり減ったように感じました。しかし、その変わり、スマホを使っている学生が増えました。

教育開発センターの設置

・全学の教育改革の推進を目的として2013年度に設置される。
・2014年9月、秦敬治先生がセンター長に着任

＜教育開発センターの主な役割＞

・教職員の能力開発（FD・SD）
　→学生と教職員が協働で大学の教育改革を推進
　　・・・・学生も重要なアクター

・リーダーシップ能力養成
　→リーダー層の学生の養成
　→西日本学生リーダーズ・スクール（UNGL）と連携
　　・・・・学生FDは最大に輩出母体

追手門学院大学

西日本学生リーダー・スクール（UNGL）

追手門学院大学

2015年の夏に追手門学院大学で
「学生FDサミット2015夏」の開催が決定しました！！
それにあたり、我々学生FDパレットは、このイベントを
一緒に盛り上げてくれるメンバーを募集します！！
新入生はもちろん、2年生以上の方でも大歓迎！
企画立案や事前準備、当日の誘導、受付まで、多くの人の力が必要です。
サミットとは毎年2回、全国から400人以上の教職員、学生が参加して
大学教育について語り合うイベントです。
（前回のサミットの詳しい内容は、本冊子 p4 をご覧ください。）
詳しく話が聞きたい方は、学生FDパレットのメールアドレスに連絡を！！
私たちと一緒にこの夏を楽しもう！！　（文：北浦）

追手門学院大学　教育開発センター所属　学生FDパレット
アドレス：makuwa168@gmail.com（代表：木村）